

部報

ていせき

VOL VII



1962

January

北海道大学馬術部



新春に愛しきものゝ名を詠みて

大場 善明

初日に浮かぶ

粉ユキの

ヒスイにも似て

リヨウヨウたる

樹に飄々と吹く

シヨウウの

朝は清し

昭和三十七年 元旦

目次

謝光に輝ける愛馬	千川	74
初代の馬たち	瑞彦	10
昭和三十六年度戦績	記	16
会計報告	田村	22
評「産話」	野田	24
36年度会計報告(中野報告)	雄一	25
ひとりのこ	浦一	30
笑わしき五月に	木重	31
「北飄号調教日誌」より	田正	37
「北大馬術部三十年度」調業を終えて	三郎	42
北大馬術部に於ける文化活動について	三郎	46
老矣は死なずたゞきりゆくのみ	萩野	52
「街采」	水野	53
これアオよお手やわらかに	萩野	56
「勤 概」	御坊	58
障害飛越調教訓練はいかにあるべきか	大場	60
調業後記	善明	74

瑞光に輝ける

愛馬

市川 瑞彦 へ主将

ウッすらと降り覆った粉雪を踏みしめ、まだ明けきらぬ札幌の街を通り過ぎ、円山の林を抜け、坂道を上りきって愛馬と共に迎えた初日の出。札幌を拓く連山の峰々は、曙光に照らし出されて蒼紫に色づき、あくまで冷えきった新春の空気が完全に調和を保つ。全身にふりそぐ光に向っていっせいに首をもち上げ、新らしき世界を窺つめる。新らしき耳の新らしき愛馬達。はるか見渡す石狩の野は限りなく広がり、我々を迎えてくれる。かくて北大馬術部は梟見峠を下る愛馬達の歩みと共に新たななる正史のページを形成し始めた。

いろいろな意味で多岐であった昭和三十六年、ここで過ぎ去った年をふり返り反省して、昭和三十七年の課題を私見ながら述べて見ようと思ふ。北大馬術部の新しい折り返しとして、又すでに半半近く伝統ある主将の席を汚し続けてきてしまった私自身の新らしい一ページを痛くにふさわしい折り返しとして。併せて日頃御寒沙汰致しておりまず先陣諸兄姉をはじめめとする方々に、近況を御報告致したいと考へます。

私は部における諸問題を次に大きく三つに分けて考えてみたいと思ふ。あくまで私個人の見解ではありませんが、これが単なる初夢に終ることのないよう部員諸君の協力を望みたい。

◎馬匹・施設について

まず驟用自馬の変遷を順に述べて見たい。(部報V号より後について)二年ほど前の秋に、不幸にも選乗り中に事故死した我部の名

馬。北標号。の後に当時主将をしておられた大場さんの努力で、我が部の先輩である富山氏より北源号が寄贈されました。当時在籍していたため、出陣後の体力回復を待って、翌年の夏頃より基礎調教が始められ順調に現在に至っております。更に翌年（三十五年）に北源号が転倒後のはれがひかず、軍令的にも障礙飛越の快用が不可能と思われた為、離脱しました。その後、日高の実験牧場より度毛の牝馬が入厩し、北楊と名付けられました。以上のことは大部分の方々が知っておられるかと思いますが、念の為、付加しておきました。昨軍になり、北斗をはじめ、老令馬の能力の衰えが目立ち、果ては道大会で北峯号一頭しか入賞できないという結果に終り、新馬購入の問題については深く考えさせられました。併し我々の調教維持に欠陥のあったことは、試合後の各方面、諸先輩の批評などで反省させられることが多かったのを見ても

明らかではありましたが、それにしても大きな氣配というものをおし止めることは出来ないように強く感じたのです。ここニ三軍系、このような争鬪がはずれ訪れるであらうことは当然予想されていたはずなのですが、北標の死などでふとした齒車の狂いから余りにも大きな切れ目、断尾となって目前に現われてきた気がするので、旧き世代より若き世代への継ぎの役目をすべし北翠、北昏（林城）の不操は我々にとって大きな痛手であったことは争突でしたが、半面我々が背負っている輝かしい戦績は現に目の前にいるこの馬、あの馬で勝ちとったと思うとき、我々の不甲斐なさを残念に思ったのも争突でした。こゝに至って新馬、古馬を問わず、調教という問題は最も重要な課題であると痛切に感じました。このまゝの状態で、一、二ヶ月の調教期間をもってしても、学生自馬大会などの大会にも満足のいく戦績は望めそうもなく、それよ

りも大きな目で見て来軍に何けて調教に専念すべきであると考へ、折りからの早突発刑阿題、旧七帯大戦主権奪のための戦政困難を考へあわせて大会参加を断念し、松本先生のお祈りので日高実験牧場より配血アラブ種、北翔号をゆずり受けました。更に我々はこの方針を徹底させる爲に、もう一頭良い馬をどうしても手に入れたいと思ひ、部員一人当り千七百円という資金カンパを取えて実行し納めることが出来ない者に対しては預制的にアルバイトをさせる強行方針をとりました。厘日女子部員を運えた二十数名が競馬場で馬券売り場、誘導馬、警備係などに分散して働き、その汗の結晶でサラ系、青毛の北飄号を購入しました。いろいろ問題があつたにもかゝらず、アルバイトの指揮をしてくれたマネジャーの麻君をはじめよく部員全員が協力して目的達成に努力してくれたのは、感謝に堪えません。又新馬送定の際には、わざわざ

競馬場まで出かけてこられ、寒風の中を半日馬を運び廻って下さり、最後までいろいろお祈りいたゞいた松本先生に厚くお礼申し上げます。こうしてようやく基本線が出来上つた次才です。この結果、熟慮の末、往軍の名馬北斗号と北春号をやむなく競馬にする決心をし、この二頭は十一月半ば離脱しました。こうして現在、北櫛、北峯、北翠の三頭の古馬と、北涼、北揚、北翔、北飄の新馬に競場騎乗馬の朝清を加え、合計八頭で自馬を構成しています。考えて見ると、我々は自馬騎乗以系最も苦しい時代の部員であるかも知れない。而し逆に云えば更に北大馬術部を発展させるには、最も重要であり、再び黄金時代を形成しうる最も恵まれた時代の部員であるのではないか。我々は決してかつての栄光によりかゝることなく、再び新しく創り出していく苦しみを味いつゝ成長して行きたいものである。新馬購入のときあのエネルギー

はやれば必らず達成出来ることを示している
ではないか。現在西貢の新馬についてはどれ
ぞれ専任の調教者へ決して調教という大任を
果せる技術があるとは考えていませんが最良
方法としてを決定し、それぞれの馬の調教
程度に応じて着々と進みつゝあります。な
にせ我々だけの方では不充分であったり、誤
りを犯している点も沢山あると思いますので、
先輩諸兄の御忠告、御指導を切にお願ひ申し
上げます。更に古馬に対しても同様に大勢の
部員を抱えた現在の部にマンテした徹底した
長つゞぎのする最良の責任自馬測を実施した
いと考えています。(不可能であるかもしれ
ませんが)

施設の面については、昨午国立七大学定期
戦主催の際に、馬場の柵が死危処置の感はあ
りました。されに修理され、馬場から馬
が狂奔して飛び出す心配はなくなり、更に立
派な障礙物が三回新造されたのは特筆すべき

事だと思います。なおこの際再三に亘る学生
課との予算交渉、葉君の斡旋など並々ならぬ
お世話をしていただいた半沢先生には厚くお
礼申し上げます。それから、たゞでさえ、地
理的ハンデイギャップがある北大であるのに
それにまた拍車をかけているのは馬場の木は
けの悪さである。春先には他は黒土が出てい
るのに依然として、氷が張ったまゝ、それが
過ぎるとまるで水田のようにぬかるみばかり、
また秋は秋で十月を過ぎると早くも春先同杯
のぬかるみといった有様で是非解決したい阿
題であるが、砂を入れるにしろ、火山灰にす
るにしろ、十萬を越す金がかゝりどうなので
おいそれとはいかない。しかし手をこまねい
て見ている訳にも行かない深刻な阿題である。
さしあたり、春になると炭ガラ入れを今年も
同杯実行したい。更に作業をもって馬場の東
側に深さ一米五〇センチ位の排水溝を掘りぞ
まして、少しでも解決して行きたいと考えて

いる。これでは根本的解決にはならないかも知れないが。自馬が八頭にもなれば、各口乗りをする。現在の馬場の狭さが目につくし、他のもつと広い水はけのよい土地に、耐久年願を通り越した厩舎と共に移転できたら、とも考えるが、これは夢に終るのではないか。もう一つ考えなければならぬのは、固定障礙の必要性である。総合馬術に参加する際には必ず考えなければならぬ問題であるし、馬が真剣に障礙を飛越する習慣がつくであらうから、少くとも乾漑又は木漑と石垣は今年造って見たいと思っている。

◎ 部生活・練習・試合について

私の理想とする部の在り方は、日頃から何回も口にしてはいる事と思いが、部員一人一人が馬を思い、部の発展を思い、又他人の自己練習を考えながら、自由^にに創造的活動を行う部でありたいことである。規則に縛りつけられ、全く自由意志を失い、畏縮した人間の集

団ではない。従って元来馬が好きだから、馬と親しんで部生活を樂しもうとする者も、馬術を通して技術を磨き、更に対外試合にも参加して人間を磨こうとする者も当然いてよいだろう。而し、あくまでも部の発展を思い、馬を愛しての行動であってほしいと思ふ。五十名近い部員を擁する我が部において、こういう云い方をすると、それに甘んじて、その時の自分の事情により、この前提を逸脱し、他の部員に迷惑をかけることに陥りやすいが、これは赦にいましむべきことである。常に自己に対して厳しく且つ創造的であってほしい。運動部である以上、まして我々が自馬をもち、飼育管理を行っていると云う条件がそれに加わってくる以上、規律が必然的に存在するのは当然すぎることであるが、自由意志のない人間の集りは部活動を沈滞させる以外のなにもでもない。部員總會などでは大いに自分の意見を主張してほしい。最近才

にどの傾向であるのは非常に良い傾向である
と思うが、たゞその時に、我が部では馬を愛
しつゞけた経験の及ぶが非常に重要なことと
あるのを忘れないでほしい。だからより良く
部生活を送ってきた上級生の意見は拜聴すべ
き価値を持っていることを。部生活において
昨耳の大きな成果の一つに女子部の発展を
あげることに出来ると思う。今迄の女子部は我
が部において、治外法权的傾向が多介にあり、
何かすつさりしない気がしたものであったが
練習量、初の合宿への参加、大会準備の寄附
廻り、新人で固めて出た招待全日本女子戦で
初陣ながら団体優勝、関東北女子戦団体三位
という目覚ましい戦績、当番を男子部員と共に
行うなどといったことは着実な発展ぶりを示
すものであったと思う。部の在り方に非常に
有益であったことをうれしく思うと同時に、
一夏の飛躍を望もう、又最近部内において自
発的に文集などが発行されているようだが、

良い傾向ではあると思う。而し我々には、ま
だまだ馬術において、例えは馬術書を読み合
ったり、疑問点について議論をかわすなど、
習得すべきものがあるように思うがどうか。
次に練習についてであるが、馬匹の項でも
述べた通り、五十名近い部員と四頭の新馬及
び老令馬をかくえている現在、あくまで調教
維持、体力維持ということを考えながら、言
葉をかえれば、馬本位の練習をしなければな
らない。人間本位に考えて、技術習得のため
に馬に無理な動作や運動量を要求するのは慎
しまねばならない。従って実演練習時間の短
縮に伴い極端に表現すれば量的練習から質的
練習への転換、即ち、例えはAということは
こうするのだと教えられて、又はたぶんでき
るようになるだろうという希望的観測のもと
に、何度もくり返しているうちにようやく実
感として得られるという態度よりも、自分か
らAを求めんとたえず懇諭しているうちに、

A、B、が得られるという鬼欲的態度が必要となつてくると思う。習うより慣れる。といふことの重要性を否定するものではないが、現在の状態を考えれば、習いつゝ慣れるのであるより他はないと思うのである。従つてこれから我々は更に更に研究欲が必要であるし、特に基本馬術についての研究ゼミナールなどより多く行なわなければならぬ。それにして、毎度ながら非常に残念なのは再任コーチがいないことである。地理的條件などから、優秀な先輩は大部分札幌を離れてしまひ、実際にお手本を示していただけないといふのが現状であります。先輩諸兄おひまな折には是非とも馬場に來て、アドバイスをしていただくたく存じます。これは一先輩からの助言であるが、経済的事情が許せば、中央より調教者と馬を招いて実際に北大の馬場で供覧や指導を行つていただくことも実現したい課程である。戦績報告については、詳細が後

で記されると思うので重複を避けたいが、ただ北大主催で行なつた国立七大学定期戦において、幸いにも三年ぶりに伝統の宮杯杯の奪還成つたのは非常に嬉しいことでした。今度の大会が綜合国立七大学定期戦として、すべての運動の種目をまよめて各大学において順に主催されることに決定され、そのオ一回目として今年は北大が当番役に當ることになりました。今年も是非この優勝杯を片りぬきたいと思ひます。この帝大戦に加え、是非勝ち返したいのは、東北・北海道学生選手権及び北海道馬術大会である。前者は今年福島大学で主催される予定であり、我々の先輩が、王決、この悲願ならずしてついに皮肉にも好敵手帝大畜大に二年連続覇権を握られてしまつたので、今年も是非面目をほどこし、悲願を達成したい。条件は同じあとは奥力あるのみである。後者は全日本、団体への足掛りとして、又今年も特に新しい発展のオ一步と

して、全力を尽したい。而し、一、二年余り大きな大会には参加していない我々は、勝つためには技術のみならずそれに加えて、よほど精神力が必要だろう。それ相当の覚悟はせねばなるまい。

◎三十年史などについて

二、数年系、三十年史発刊阿題について各代に亘り準備されておりましたが、発刊費用捻出が思うように進行せず、すでに原稿募集以乘一年以上の月日が流れました現在、ようやく発刊の運びになりましたことは、部員諸君と共に喜びたいと思えます。ここに我々の不手際をお詫び申し上げると共に、発刊費について、経済的に多大の御迷惑をおかけした先單諸兄に対してこの稱をお借りして厚くお礼申し上げます。その際傍をとっていただいた重園先輩をはじめ在京のB会の会員の皆様には部員一同深く感謝致しております。なにかと連絡の不徹底、礼を失したことも再三

であつたこと、存じます。併せてお詫び申し上げます。また日頃の部運営に対して、経済的に又精神的にお世話になつてゐる有縁先輩はじめ北大乗馬同好会々員の方々にお礼申し上げます。

最後に今迄一致協力して部活動を行つて来今後も又矢に北大馬術部の発展を期して活動していきたいと考えていきます役員の諸君を紹介致します。

役職名	氏名	学部学年	出身校	備考
主将	市川瑞彦	(理物3)	旭川西高	
副将	堀川芳男	(農畜3)	郡立武蔵立高	術任
	鬼田正臣	(農畜2)	郡立太田高	兼主
マネジャー				
	原 重一	(農畜3)	郡立小石川高	面当
	小島 武	(医乗2)	土浦一高	渉外
	志木一允	(農林産3)	郡立西国高	計
	三浦清一	(教育2)	土浦一高	兼主
飼育	清水 洋	(農畜3)	郡立岸和田高	馬体管理

岡田征至 (法学3) 舟立 役塚高 作葉園哲也
 高不祐八 (養畜2) 東海高
 事務主任

小出秀達 (医医1) 舟立 住吉高

松永武彦 (理類1) 藤枝東高 (脱舎係)

木野祐亮 (理類1) 旭丘高

八木正乙 (理類1) 光屋高 (馬具係)

萩原雅英 (文類1) 高松一高

田村雅英 (工応2) 函中部高 (記録係)

大木誠永 (理類1) 小樽録陵高

横田 肇 (理類1) 東海高 (部室係)

滝沢南海雄 (理類1) 旭川西高

宮崎 健 (文語3) 舟立住吉高 (圖書刊行係)

守屋 正 (理類1) 翠嵐高

概略総括してみると、昨年は、あまりにも多くのことが重なりすぎた。しかし、基礎はできた。今年こそ、北大馬術部にとってまさに、栄光への脱出。の年でありたい。

初代の馬たち

—馬の類—

千 東 祐 記 八三六年度主任

一早く、四年間の大学生活も馬術部を去ることによって終止符が打たれんとしている。そして馬術部を卒業すること、馬たちとの接触を断つことによって私は学生生活に何か大層な危れ物をして行くような気がしてならない。かなしいかな、それが一体、なんであるか身体的に表出できずにいることは、全くはがゆくてならない。このはがゆさが私の頭の片隅に残っているうちは、私は北大馬術部を自分のものとして愛して行くことができるだろう。そして、四角に区切られた小さな身体を窮屈そうに横たえている姿を想い浮かべ

ることができらるだろう。

こゝに私は、既に忘れ去られようとして、
る初代の馬たちの想い出を披露させて頂く機
会を得てうれしく思うものである。

馬の顔などと言うものは、全くの素人から
みれば皆一語にみえるものだ。やたらに長い
顔だったと言う程度で一度に何頭もの馬をみ
せられたら吾々でもちよつと憶えるのに苦勞
する。人間なら「奴の顔は馬づらだ」などと
言われるとちよつと意味が変ってくるが……。
私が北大馬術部に入部したのは、昭和三十
三年四月で、恒例の「初心者のための乗馬講習
会」と言うものに参加した。そこで、初めて
北大馬術部の馬たちの顔を見たのである。勿
論、講習会費をなにかし。か払ったような気が
する。ところで、馬の顔は短時間では特別な
事件がなければ神々、おぼえ切れないもので
ある。一、二ヶ月もすれば、あの馬は石後殿
一白とか、珠目上とか、流星舞梁白とかと

言う普通の癖長は判る。しかし、私にはこん
な記憶がある……。

講習会の時は馬が九頭出ていた。顔中ヒゲ
だらけの先輩が馬場の中心で何か怒ってい
る……。先輩の馬には先輩が乗っている。

その後に入生が乗せられて、心細げに、鞍
にしがみついていいる。中心に居った先輩が先
輩が先頭の馬より馬名を呼び上げていいる。一

番……北^多……二番……北^多……六番……アサキヨ

……九番、ヨネマツトと呼んで終った。各
前の判ったのは北の付かない馬、朝滑号と木
松号だけだった。一日過ぎると名前と顔とが
一致しなかった。それでも講習会が終る頃
には大体、名前と顔が一致する様になった。

講習会中のある時、こんなことがあった。

二日目だったと思うが先頭の足腰の筋肉のし
っかりした構憚な感じで、体表は後軀の旋毛
の良く目立つ、艶の良いい黒鹿毛が急に、歩み
をチヤカ、チヤカと短節にしたかと見るや、

自分の背中に人の居ることなど何んのその背筋をギユウと丸めて、跳ねだしたのである。四肢を同時に地上より離し、その肢の空を切る音は凄じいものだった。そんな凄じい跳ね方を四、五回連続してあると上の人は、万心の手綱さばきも功を奏せず、ついに鞍上の人たり得ることができず、地面にもんどり打って落ちたものだ。その時の先軍が〇さんだったか、川さん（四耳生）だったか、その顔はあからさまにはおぼえていない。たゞ、私の眼の前で起った入部後最初の播車でも今でもなお、はつきりと記憶しているのは、人頭を振り落して誇らしげに佇んでいる馬のキリツと締った口元、張りのある切れ長の眼、そして、木だぶどけなさの残っている顎の美しい線、更に鼻スジが通ってツンと高い、近付き難い感じのする顔だった。これが天下にその名をさせた北標号だった。この事件があつて以来、新入生はこの北標号に乗って、落馬せずに課

習を終らせることに唯一の誇りを感じるようになり、口では怖れながらも心中はこの馬にあたるように願ったものだった。この馬は普通はバンケットのそばでは必ずと言ってよいほど跳ねた。この馬は又、多くの人々に色々な悪い出を招かせて、憎しまれつゝこの世を去った。しかし、この馬はど多くの先軍の記憶の中に活々として残っている馬も稀であるうと思ふ。

部班運動で常に二番手を受け持っていたのが老巧、北斗号であつた。毛色は鹿毛で、一見、華やかな体軀ながら肩、胸幅等は當時は仲間ガツシリしたものだつた。眼は相当、吊り気味で大きすぎず、鼻樫は疵がりすぎず、小造りながら賢相の持主だつた。私はこの馬では若い経験がある。

講習会の四日目頃だつたと思ふが、漸く、先軍に声をかける程度になつた頃である。講習の練習を終えて、先頭の馬から順に水槽に果

て水を荒弁に飲んでから鞍をはずされた馬が
順次予め決っている馬繋柱につながられて並ん
でいる。中には、身体中から真白い湯気を立
て、汗ビツシヨリの馬もいた。と、みると
もなしにみていたその中の一頭が腰を半開き
にして、グツと低い位置に落したと見るや、
やおら、バーなる一物を垂直に下し、放尿を
開始した。一瞬、私はその流れ出する煙の雄
大さにもとれたものだ。その内、流れも切れ
たのでその馬の顔をのぞきみたところ、小笠
りの顔にきらきら光る眼差しとその下に白い
剛毛のアクセントを付けた男らしい顔がいかに
も満足愛に宙に浮んでいた。しかも、その
男らしさも、実は、林しさを誇らわすための
仮装であることが先軍の話で判った。

るが球がないことを理解し、漸く、性別の雄
雌、セン、の辨別がいった次才であった。そ
の時、私は鬼い出して再び北斗の顔を振り返
って見たところ、心なしか林しどうにうつむ
いていたが、テレ隔しの杯に前かきをして餌
餌をはしがった。この馬も、すでに飛馬とな
ったが、多くの男性、女性から愛されたスタ
ーだった。心からご苦労杯でしたと感謝の念
を禁じ得ない。

三番手を受押っていたのは、スラリとした
姿態で、サラスレットと見まごうほどの美し
い馬で、左後肢のみが純白の鹿毛、北澤号で
あった。北澤はホスターとか、色々冠宜博号
興で有名である。ある有名薬品会社のカレン
ターにもホスラ並不若草をゆっくりとはん
でいる北澤号の優美な姿が大写しにされてい
た。北澤号には、私はの君と共通の手ひどい
落馬の経験がある。それは入部して二ヶ月ほ
ど経ったある晴れた日の午後、私はの君と本

カラ並木の真の方に繫いで青草を食せてある北澤号と北嶺号を連れに出掛けた。〇君は北澤、私は北嶺にのり、並木を厩舎に向つてばかばかやつて来た。もちろん、探馬で引綱の先にはモクシしか付いていない。私は先を歩いていて、何か起りそうな予感があったのだが、そのとたん、後を歩いてきた〇君の北澤が何かに驚いて、突然、駆け出したのである。さあ、前を歩いてくる北嶺も上の私など顧着なく駆け出し、北澤と競走する形となった。手には手綱換りの引綱でその先にはモクシしか付いてないとする。夢中になつて駆けている馬には何の抵抗にもならなかつた。

二頭の馬はカラ並木を真しぐらに駆け、厩舎に向つてゐる。途中には収穫庫と兎小屋の所とニカ所に柵り角がある。私はどのどちらかまで落馬すると思つた。それも無冠識のうちにてある。正席など全くなく夢我夢中で馬にしがみついていた。

突降。〇君も、私も、生きた心地はしなかつた。気が付くと眼前に検査所の運物がドン、ドン迫ってくる。大変と思つて身体を起したとたん、二頭の馬は同時にピタリと停つたからたまらない。しがみついていた、馬の上からはと兎れば、私と全く同じ状態を地面に転つてゐる。二人は死物狂いでしがみついていた極度の緊張感から脱れたので、ホーと虚脱状態にあつた。傍で、大声でゲラゲラと笑う兎草の声がかすかに聞える。私は氣をヒリなおして立ち上ろうとする、眼の前に北澤の顔があるではないか。こんなくしように思つたけれど、身体が痛くて、思うように立てない。イテテ……と腰をさすつてゐると、又そばで大声で笑つてゐる兎草がゐる。私は無理して立ち上ると目がまだホーとかすんでゐる。そんな私の目に、北澤号の珠目の白さが飛び込んできた。そして、目がはつきりするにつれて、

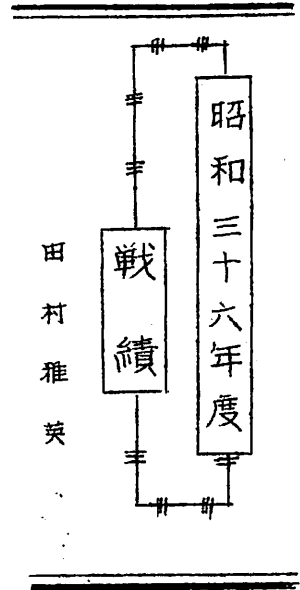
北溟の頭も霧の中からでも出てくるように除々にハッゴリとしてきた。その馬の顔面が毛の色と混同して、紅潮してでもいるかのよう
に私の意識の中に残った。それは鮮明な記憶として私の意識の中に生きている。この北大小町も寄る耳波には勝てず、飛馬となった。時すでに、二十四才の高齡に達しておいた。

更に、米松君に付いて記さねばならない。米松君は農場所屬の養新處で、確かペルシエロン系種で、特徴と云えば、肢が短く、胴が隘分と太かった記憶しか残っていない。たゞいつも裂蹄をやっていた。鉄はほとんど付けたことがなかった。新入生はこの米松君には相当なやまされたものだ。新入生は、米松に乗るよう指名されるのを皆んないやがった。性根は大広おとなしいのだが、新米が乗ると、すっかり態度が変り、乗り手の意志もなんのどの号令をかけている上級生の方へはこのこと出て行くし、道草はよくする。そ

の度には怒鳴られるのは何も知らない我々新入生だった。この米松君に乗せられた時ほど伯軍を付けている上級生をうらめしく又惜いと思ったことはなかった。普段は寝餅に慣用していたので練習にはあまり慣わなかつた。しかし、試合時には出して、他の学校は隘分舌しんで居ったように、仲々便利なところもあつたとみえる。米松君は後に故ある病、伝食と面いて居るが確かでない。のため飛馬となった。

この時は、我々は全く知らないうちに処分されたので、担当馬とまで、どの居ないことに気付かなかつた。獲かしま彼の馬、此の馬は今、既にこの世にはいない。我等北大馬術部も世の蔭に從つて新陳代謝を経て、その所有馬の半数は若い馬に換つた。これも北大馬術部の発展の一過程であることには間違いない。初代の馬たちの冥福を祈ると共に、我等北大馬術部の一級の発展を期待して止まない。

一九六二年一月



○五月四日

対札幌柔馬クラス春期定期戦〔於北大〕

北大 (-251.25) —— 札鉄 (-422.25)

出場選手

札鉄 穴田、山本、布浦、田中、西田

北大 小山、恩田、市川、鶴見、清水

○五月五日

対帯畜春期戦〔於北大〕

★シニア戦

北大 (-43.75) —— 帯畜 (-62.75)

★ジュニア戦

北大 (-14.75) —— 帯畜 (-15.0)

対北大同好会春季定期戦〔於北大〕

北大 (-200.0) —— 同好会 (-160.75)

出場選手

北大 千葉、小山、鶴見、恩田、巻水

広阿、市川、岡田、小出、清水

帯畜大 立川、山木、小松、中曾根

塚本、鷺田、玉郎谷、中原、大野

同好会 正壺、斉藤、岡田、田中、松尾

○六月十七日十八日

才十回東北北海道地区学生馬術大会

〔於東北大〕

予選リーグB

一位東北大 (-173.75)

二位北大 (-183.5)

三位岩手大 (-530.0)

四位宮城大 (-725.25)

決勝リーグ

東北大 (-244.75) —— 北大 (-253.0)

帯畜大 (-175) —— 東北大 (-130.5)

帯畜大 (1995) — 福島大 (19350)

東北大 (1420) — 福島大 (10225)

帯畜大 (1600) — 北大 (1845)

北大 (1250) — 福島大 (1267)

帯畜大 東北大 北大 福島大の順である。

この結果帯畜大が全日本学生馬術

王座決定戦の地区代表校に選ばれた。

出場選手 大場 千策 小山 鶴児 市

川 廻川 恵田 志水 原

○七月八日

北海道馬術大会 (於帯畜大)

六段

優勝 大場 北嶺号 北大

婦人少年障害飛越

優勝 滝沢 北大

貸与馬中障害

優勝 西田 (北大同好会)

二位 千策 (帯畜大馬クラブ)

○八月二日三日

才四回全日本女子学生馬術大会 (於北大)

団体戦

優勝 北大Aチーム

二位 東北大

三位 帯畜大

個人戦

一位 田中 (早大)

二位 中原 (東大)

三位 滝沢 (北大)

才四回全日本女子学生馬術大会 (於北大)

八月二日三日絶の天候に悪まれて北大馬場

で行なわれた。馬場の調子は良好。札幌に残

っている部員が少なく、準備その他で、忙し

かった。参加校は北大、早大、東大、帯畜大、

東北大、福島大の六校である。北大はA (野

江・滝沢) とB (入江、牧) の二チームが参

加した。才一日目は団体戦、二日目には個人

戦が行われた。団体戦では、帯畜大対北大A

との試合で、経路違反の爲あえなく破れてしまった。一方日チームも帝畜と対戦したが、善空しく取れた。結局最後に勝ち進んだ東北大、帝畜大と、敗者復活戦で勝った北大Aとの三チームでリプレー戦が行われ、Aチームが実力を発揮して優勝することができた。

読いて行われた口人戦では、北大滝沢、東大中原、早大田中の三人により、甄清哥を倒して決勝戦が行われた。期待の北大滝沢はゴール前でおしくもタイム失収となった、二位となった頼大中原は、ゴールに入った瞬間落馬し、天神状態に陥り、直ちに北大病院に運ばれ、一瞬試合は中断された。脳内出血だったが手早い処置と手術後の経過がよく生命に別状なく一ヶ月後に退院したが、安全帽を被っていたれば多少とも緩和されたであろうし、同時に既に、もう少し休憩した後でやったならこのような事故が防げたのではないかと、後で反省することが多かった。全試合を通じ

て感じた事は、一年目部員の使用ぶりであり、今後の活躍が期待される。なお北大の出場選手は寺江(一)、滝沢(一)、入江(一)、牧(一)である。

※(一)内は学年。

○八月五日六日

- オ19回国立七大学馬術定期戦(於北大)
- 優勝北大(四勝一敗)、二位東大、三位名大、四位九大、以上三勝二敗、五位京大、六位東北大以上一勝四敗
- 東大(—85075)——東大(—1214)
- 北大(—9545)——九大(—12365)
- 名大(—75225)——東北大(—794)
- 北大(—36875)——京大(—43575)
- 東大(—66975)——九大(—997)
- 名大(—1252)——東大(—1018)
- 九大(—870)——東北大(—891)
- 北大(—4815)——名大(—82775)
- 東大(—66875)——北大(—68975)

九大 (-932) —— 東大 (-1231)

北大 (-483.25) —— 東北 (-508.5)

名大 (-816) —— 東大 (-993)

京大 (-951) —— 東北 (-1055.5)

九大 (-926) —— 名大 (-1127)

東北 (-617.25) —— 東大 (-742.5)

オ一九回国立七大学馬術定期戦

女子戦に競き八月五日六日と北大で行われた。この試合に備えて、新しい障壁が三つ程出来、試合に色を添えた。この日も良い天気、馬場のコンディションも良かった。参加校は北大、東北大、東大、名大、京大、九大の六校で何れも油断のならない相手である。試合はリーグ戦で行なわれた。オハ試合まで順調に勝ち進んだ北大はオ九試合対東大戦に勝てば優勝という所までこぎつけたが、審判の善が送手に良く聞き取れなかった事もあって極差で破れてしまった。その為優勝か否かは他の試合にかかった。結局最終試合東大対

東北大戦に絶てが賭けられた。その時の何とも云えない愛持は、あの試合を見ていた者であれば長く悪い出せる事であろう。我々の願いがかなって、東北大が勝ち、北大の優勝が決まった次才である。

○八月六日

北大対東北大定期戦「於北大」

北大 (-1101.5) —— 東北大 (-1157.5)

出場選手

北大 堀川、市川、鬼田、菟水、清水

西田、原

東北大 榎山、中沢、甲田、稻村、吉田

吉田、武田

七帯戦に続いてすぐ行なわれた、自馬であるに拘らず、五喰われであまり芳しい試合ではなかった。

○八月十五日

北大対法大親善試合シニア戦「於北大」

北大 (-327.5) —— 法大 (-562.0)

出場選手

北大 鶴見、玉沢、清水、市川、堀川、

荒水、

法政大町田、照田、大矢、星山、奥謙、

荒井、

ジュニア戦

法政 (-2235) —— 北大 (-2775)

出場選手

北大 八木、小島、荒水、小出、

法政 杉山、光山、武田、佐藤、

オニ次合戦中に行なったものである。

こういった試合を持つ事は、他校との親睦

を計る上にも、その実力を知る上にも大切

な事である。

○九月三十日十月一日

全日本馬術選手権大会 (於福島市競馬場)

六段 市川 (北嶺号) 五位

○十月七日

オ一六回國体馬術の部 (於秋田果角館市)

六段 恩田 (北嶺号) 六位

○十一月十二日

北大対帯広音程大学秋季定期戦 (於帯広)

シニア戦

帯広 (-6275) —— 北大 (-7070)

ジュニア

帯広 (-177) —— 北大 (-130)

オースン戦

北大 (-18425) —— 帯広 (-26375)

出場選手 大場、玄岡、小山、市川、堀川、

恩田、荒水、清水、原、岡田、小出、小

島、八木、高木、三浦、田村、滝沢、萩

原、水野、松永

春に獲得したカンスを再び相手に残して果

たのは残念である。スピード感にあふれた

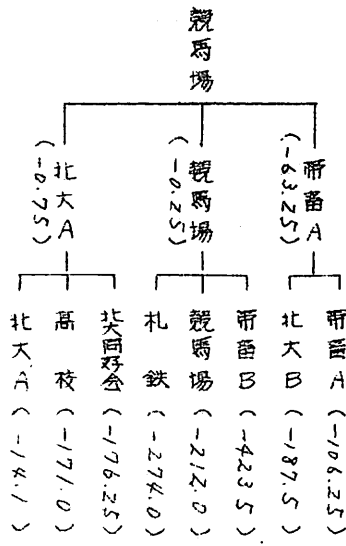
試合で、北大ではちよつと味わえない事だ

ろう。参加選手全員が試合に出る事が出来

ずいであつた。

○十一月十九日

北海道団体馬術選手権「於札幌競馬場」



全く時間減点のみで勝敗が決した。珍しい事であるが、このような試合もある。争を記憶しておく必要がある。試合は前半は経路違反などがあって、多少乱れたが後半白熱化した。Bチームは二軍目ばかりであったが善戦した。

- 出場選手 市川、恩田、清水、志水、原
 岡田、小島、高木、八木、三浦、田村

○北大対北大同好会「於札幌競馬場」

同好会 (-95.5) —— 北大 (-204.0)

○北大対札鉄「於札幌競馬場」

札鉄 (-181.0) —— 北大 (-204.0)

出場選手

- 原、岡田、三浦、清水

○興業比女子戦「於福島」

- 一位青山、二位福島、三位北大

出場選手 寺江、滝沢、牧

以上で今年の主な試合の戦績を終りとする。甚だ不完全で申し訳ないが、詳細を知りたい方は、部室の戦績表を参照するなりして下さい。
 来年は再び北大で七帝戦が行われる予定なので、今年の成績を参考に、更に努力される事を望む次第である。

35年度

会計

報告

恩田正臣

三十五年度会計

（明しように思う。先ず次の表を見ていただきたい。）
 三十五年十月一日より三十六年七月三十一日迄の会計内容を報告し、説

収入		
項目	一般会計	特別会計
前年度繰越	22,839	
部七・体育会	73,500	
学生課より	2,100	
オ一回映画会純益		40,690
オ二回映画会売上		78,970
アルバイト		25,400
講習会費		17,600
阿符会より		10,300
(エンバク代として)		
東京OB会より		5,500
(既休、全日分を除)		
その他		4,144
合計	98,439	182,624
	281,063	
支出		
項目	一般会計	特別会計
飼養	114,580	
備	2,085	65,005
通	15,018	
信	5,295	
試	12,500	
観	9,900	
遠		31,800
作		1,950
業		3,800
慰		
勞		
他		
合計	159,378	102,555
	261,933	

一般会計 - 60,939
 特別会計 + 80,069

先ずオ一に目につくのは、一般会計の大幅な赤字である。これは何によるかと云うに、昨年オ一農場で收穫されたエンバクが、九月から一月までの期間しかもたず、二月以降を部で購入せねばならぬかつたからである。

昨年度飼育経費 二四、九二六円、そして一昨年度 二九、五三二円と、今年度 一一、四、五八〇円と比較してもらいたい。この飼育の費用のうち、九〇%にあたる一〇、二七八〇円がエンバク購入費用である。

エンバク問題は、今後も残されている。農場の作付面積が減つているとも聞く。実情を良く調査し、理由を確かめ、その対策を学校当局と交渉すべき重大問題である。

一般会計でこれだけの赤字が出たため、それをうめるべく、資金集めには、部員全員が良く動いてくれた。たてつけに行つた映画会、商店街の宣伝、講習会etc、

おかげで特別会計が、八万円も赤字になり

かるうじて破算をまぬがれたのである。

庶務の特別会計は、その中にオ二回映画会開催の際の費用約五万円を含んでいる。

逓征費は、昨年度一五七、六九九円と比べ、約八割減つていいるが、その細目を上げると、

昨年度、関東女子送（三、七四〇）番大定期戦（秋春）（五二、二八〇）全日、団体（一、六四八九）王座、学生送手収（五四、二六五）東北北海道大会（九、六〇〇）帝大戦（二、七〇〇）東日本（二一、三二五）

今年度、学生送手収（四、〇〇〇）講習会派遣二名（七、〇〇〇）東北北海道大会（二〇、八〇〇）この大きな差は、参加試合の減つたこと（王座、東日本）主催した、ゆゑ逓征費としてはかゝらなかつたもの（帝大戦、定期戦）などが大きな理由ではあるが、実際に、金がないために、節約を重ねたことも事実である。昨年まで逓征費は、逓征者の交通費宿泊費を全額支給していたのが、今年は半額に直

いものを送手負担にしたのである。

今年度の会計の特徴として

- 一、エンバクを部で購入せねばならなかった。
- 二、そのため遠征費その他の経費の削減と、
- 三、金策のために、頭を痛め、部員のアルバイトの量が倍増したこと。

等があげられると思う。即ち根本問題はエンバク問題である。この問題をうまく解決することなしに、再び健全な部の会計は望めないであろう。

最後に、二年間会計係を命ぜられたが、慰懐な爲に、次期会計の三浦君に、多々迷惑をかけたことを、申しわけなく思っている。

又一念願であった部費の滞納の絶滅を達成できなかった事は残念であった。次期会計に是非お願しいらしい事である。

童話

入沢 雄 檄

私はボロ靴をはいた
泥にまみれた。穴のあいた靴
雪道をボロ靴は歩いてる
空からオリオンが見下ろし
シリウスは青く、滑く、鋭く
ボロ靴は雪を蹴った
雪は空しく取った
何も知らずに……………

穴のあいたボロ靴に
冷い水が入ってくる
遠い過去を伴って
ボロ靴は氷を蹴った
氷は空しくバリツといった
何も知らずに

36年度 会計報告〔中間報告〕



三浦清一郎 (36年度 会計)

会計年度中ではあるが、現在の部の財政の動きを知ってもらうために発表してもらいました —— 様より

○収支概略報告表

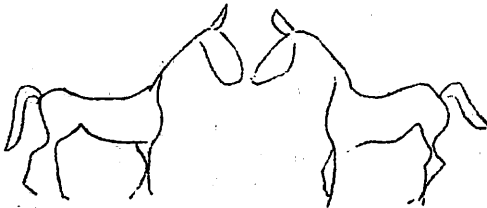
月	収・支	摘 要	金額	備 考
8	収入	前年度会計からの繰越金	5320	八月には全日本女子学生馬術大会及び国立七大学定期戦が行われたが、それに因しては並立会計で行った。
		競馬場誘導員アルバイト	6000	
		部費 (その他)	3750	
	小計		15070	
	支出	備品、雑費	1634	
	30年史 写真代	759		
	小計		2393	
	差引		12677	
9	収入	8月分繰越金	12677	北翔号引取りに因しては、日高へ受け取りに行った四人の部員の宿泊費も負担した。
		競馬場アルバイト	6000	
		部費 (その他)	20950	
	小計		39627	
	支出	北翔号引取りに因して	3730	
	競馬場アルバイト昼食代	1800		
	団体運送に因する諸備品	1950		

	小計	備品・雑費	1230	
	差引		8710	
10	収入	9月分繰越金	30910	学生自馬大会に関する寄附金は3000円の未収金がある。
		体育会予算	10500	
		国体選征に關する寄附	16500(3000)	
		太榮・西村両先生歓迎会残金	1120	
		被 贈 アルバイト	2000	
		部 費 (その他)	5250	
	小計		(63280)	
	支出	全日本学生自馬大会参加費	1200	
		全日本国体学生自馬大会選征附添 添費その他	3630	
		30年史発行費	24900	
		備品・雑費	2695	
	小計		32425	
	差引		30855	
11	収入	部 費	1250	北観号購入に關しては独立会計で行いましたので別に報告します。
		北海道馬術貸与馬団体戦	3000	
		〃 二位賞金	700	
		映画会税金代戻元	5600	
	小計		41405	
	支出	北海道馬術団体戦参加費 (=チーム)	2000	
		備品・雑費	3156	
		対帯畜定期戦選征補助費	14700	
		〃 選征諸雑費	1070	
		10.11月30年史編纂に關する雑費	1895	
		關東北女子戦選征補助費	10000	

	小計		32821	
	11月現任の部会計		8584	

(以上)

- ② 1. 作業後の部費慰労費・交通費・電話費・練習中に於けるけがの治療費等の出費は通時会計が判断して認可し、雑費として取扱っている。
2. 競馬場券昇馬のアルバイトは昼食代として一人75円を支給し、他は部の収入となる。
3. 北線号(ゴウセイ号)購入に関するアルバイトでは一日の平均賃金350円のところ250円だけ部費として口人に還元し、他は部の収益とした。
4. 国体・学生自馬大会へのつきせり馬の収買に際しては馬術連盟に認められなかった一人についてのみ支給した。
5. 三十年史編集に際する、部費からの支出は広告代その他の埋め合せとして出發したが、年表に際しては役目、独立の会計報告を行う。
6. 全日本女子学生馬術大会及び国立七大学定期戦に関する会計報告は、マネージャーの報告がまだないので記載できない。
7. 口人が一時たてかえる形を部の支出があった場合でも——備岳、雑費等に関して——口人の滞納部費をノート上で消した場合、その収支は前表から除いてある。



やりにくさんだん

— 弘年度会計中間報に添えて —

前年度会計マネージャーの恩田さんから部
取政を引継いだのが八月、五〇〇〇円の金を
渡されて、さてどうしたものかと途方にくれ
た。

まず引継いだノートを元にして、部に対す
る個人的借金、部費の納入状態等を調べて表
にし、少し気の毒だったか、部室に掲示して
部取政の窮乏を部員全員の前に明らかにした。
私が発表した部費、入部金、映画会残金等の
滞納（部費に關しては前年度（35年度）未納
金についてのみだった）は、実に、総額六
万円に近いものであった。こういう状態のも
とで部取政の窮乏は火を見るより明らかであ
った。

滞納部費の解消が当然のことながら当初の
オ目標となった。八、九月中に、払える人
回からは、できるだけ未納金の徴収に当たった。
又この時、志水、原西兄が三十年度貸金調運
のため、東京のB会の諸先輩を回ってくれた
時の交通費その他の雑費として約三千円の部
出費があった。又風体遠征に際して、不足し
ていた備品を整えると共に、遠征に必要なる
諸道具を購入した。又北畑号引取りに關して
大場、市川、高木、小島の皿兄が日高北大突
駿牧場に出張した費用を部が負担している。
その他大よそのことは前表を参照していた
きたい。たゞ事實上の金の出し入れはなくっ
ても、各部員が諸々の諸経費を出費してくれ
た時、すなわち、志水、原西マネージャーの
活動費の場合などは部費の滞納部費からノー
ト上差し引くという形式をとった。というこ
とをつけ加えておく。又現在では、滞納部費
二万円弱、個人借金（これは部から貸し出し

たのではなく、部に入るべき金が会計まで戻ってこないというケースが大部分である。が約一万五千円ばかり残っている。

北大馬術部会計のアウトラインは以上のようだが、これから今年の抱負、会計マネージメントの問題点に触れてみたい。

ともかくにも北大馬術部のふところは火の車である。冬期飼料の問題、寝ワラ、乾草の問題、来年に控えた総合七帯戦、全日本女子戦の開催資金の問題、団体、全日本その他の遠征試合の資金等々、問題は複雑かつ山積している。その中でも特に冬期飼料の問題は昨年度の事情を調べても明らかのように、部員のアルバイト、映画会等多大の努力と十方を超える金をつぎこんでいる。課外活動としての馬術部が、正課の講義をサボらなくては、その活動と存在とを維持できないような本末転倒の状態を全くナンセンスな話である。今年はずいにも、松本、半沢両先生を始め

とする多数の方々の御助力もあって、新馬の購入、三十年度発行等大きな仕事を完成する。こどもでましたし、又来年度の見通しも明るい。そういう風に北大馬術部の見えない土台となつてくださっている人々の心に抱えるためにも、私はチーフの志水兄夫々、滞納部費の一扫と、部を通してのアルバイトによる部員全員の協力とをこれまでも実行してきたし、これからもやっけていきたいと思う。又対外的にも、飼育、馬具、マネージャー等の係との連絡を緊密に保って、予算書の作成、報告書、覽積書、依頼書等の不備によるミスなど決してつくらぬよう注意して行きたいと思う。

体育委員会の利用、学生課との話し合い等々
これからの課題は豊富である。



ひとりごと

原 重 一

ハマネーゲーム

○真赤に燃えるストームを衝に英語の辞書を
——何手ぶりかに——パラパラめくっていま
した。何げなく *manager* の項に目がとまり、
自分の部での仕事を再認識しました。そこには
こう書いてありました。 *a good manager*、
you 経済の上手な人。 *a fair manager* 経済
の下手な人。自分が *good* か *bad* かは解り
ませんでしたが自分には。

○馬場が暗解けと共に戦状と化し、泥と水との
斗いにあけくれる昨今、つくづく思いました。
砂が入った。水はけの悪い常時良 *con-*
dition を保ち得る馬場がほしいなあ。トラ
ップで何台分いや何十台分などどちらよっヒ

話題になりました。泥と汗とで廢舎にもどれば、
彼等の爲に *Party* が一つほしい。せめて
木道でもついでくれると。我々の所を憎しむ
からではありません。可愛い大筆な彼等の爲
にはしいのです。

○大勢の仲間がじやかにもにありついている。
着交えに忙しい者、良靴を手入れする者、課
後彼の部屋、もう少し広い部屋がほしいなあ
と思いました。

○安心して彼等に一手中エン麦を喰わせこや
りたいとつくづく思いました。帯に何んとか
するで何んとかしてきた対エン麦リ餌料問題
も手巾行争から消したいものだと思えてい
るのです。だがなかなかな難しい問題です。

○国工七大浮載、招待全日本女子の優勝は始
めての我々の仕事を満足させるに充分でした。
どうやら仕事出来たのは千景兄はじめ四手目
の陰からの援助、部長の協力と文字通り我が
部の伝統を地で行ったものでした。

○部員の寄附金と *anxiety* ですばらしい馬が入厩したのは11月の中旬でした。竟馬場への *anxiety* は全部員が新馬を夢みながら参加、松本先生の御骨折りもあり、近い将来必ず諸大会にその勇姿が見られるものと確信しております。なお部で行なう *anxiety* についてはその方法等でお分にとっても今後のよい参考になりました。

○長年の愚案であった三〇年誌も束巻早々に完成のはづ、喜ばしきしだいです。先陣方々の定がためのもとにちようど我々の時代に完成をみることはうれいことです。部員が真正に連日がんばっているのもあと少しです。三十年の輝かしき伝統を土台に明日への飛躍を夢に、更らに部生活に力を入れたいものです。

○又一人と部を去っていった。学業が忙しくなったのだろうか。仲間が又けていくのはなんとしても寂しいものです。ある事情で途中

を部を去っていった先輩のことは、一止めるとやたらに馬がなつかしくてなま、それに思ったようにはウマクいかないよしがこんな時に飛び出されるのです。

○馬場一馬を通じての付き合い以上に上級生との接触はない。そこには人間関係として得るところはない。失望した—ということを今になって言われるのは残念だ。いろいろ見方はあるだろう。我々も反省の材料としたい。

○自分で、他人で解決しなければならぬ問題を馬術部という一つの団体！社会に自からの責任を転化してしまう場合があるのではないかと思うが、どうだろうか。

○フーセンをつけなくてはなかなか持ち上げられない腰の重い *manager* だが *sub* として小島、三浦両君が全ての面で活躍して、助けられるのはありがたい。

○ふたたび *to manage a horse* は馬を御すると訳すのであります。この頁赤に燃えるス

トープを物置につっこむ境には、カインぱい
馬場で練習出来るシーズンの駒まくです。そ
して全国から数々のカツスをちようだいし、
所せましとならべたいものです。そのため
は *a good manager* として、さらに又馬を
上手く *manage* 出来るように努力したいと
思っております。

○ *manager* 日誌を 一九六一・一二

めぐりながら *manager* 原 重一

去っていくシーズンをふりかえり、新たに迎
えるシーズンが賤良のものになれと念じなが
ら十日間かゝって誓いたものがこれです。



美わしの五月に

売水 一九

美わしの五月に

樹々の梢は燃え出る

折ふしの風の香よ

おりあらば伝えてよ

解かに流るゝ情感の

傷み多かりし溜鬼を

美わしの五月に

眠き大地は眠まる

折ふしの土の香よ

おりあらば伝えてよ

静かにふくるゝ情感の

愁い多かりし歎びを

生きものゝ記録

清水 洋

飼育



飼育管理の現状

雪もようやく根雪となって道路も歩きやすくなった此頃です。今日も外乗に出掛けて行った。今頃は雪をけちらして山野を駆け巡っていることだろう。

広岡先輩より飼育係を引き継いで半年、本年も部報を出すことになり、飼育係の目から見た馬術部の現状及び馬管理についての一般的な知識を書いてみようと思っております。

そこで一部二部に分け一部は諸先輩に、二部は現役部員に読んでいただければと思っております。

一部

現在我部の馬の頭数は北京、北翠、北嶺、北嶺、朝濟、北揚、北翔、北颯の以上八頭若い先輩諸兄姉にはおなじみだった北斗、林城、北輝等はそれぞれ商令のため将采の活躍見込と遠なのと高令と脚腫のため出しました。それで新馬が多くなり、その調教のため下級生に迷惑をかけている事を上級生達は気にしている状態です。

次に飼料について、エンバク、ねわれ、乾草不足は我部の伝統でどうしようもないとあきらめた様子でしたが、小生も脚多聞にもれずどの向題で頭をなやましています。これは飼育係のみの向題でなく、部全体の向題でこのまゝでは我部の活躍に大きな支障をきたすのは疑いのないことなので、安心して練習に精出せる様、部員全体が一丸となって解決に努力してまいります。

デントコーンは割合豊富にあるので、極力

これを使用することにし、下痢を防ぐため、時々乾草に代えて支給しております。

今年はあまり大きな事故はなく各馬元気に活躍しています。たゞ北京が伝食の気味があるというので体温を計ったり、血液検査をしたりしましたが、伝食だという確証が出来ず

肝臓摘出しの方

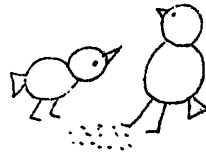
法がないのです

が、それまです

ることはない

と虫下しをかけた

くの、テツヤに通っています。仲々上手です。



だけに止めまし

た。それから、

テツヤ、中野が

飛業したので、

今は桑園駅の近

競場にバイラー（自動梱包機）が入ったこと、牧草の刈り倒し梱包、運搬が全て機械力によって行われ、我々部員は伝統の夏季合宿で乾草上げが充分に行えず、新入生連にその消耗さを味わってもらうことが出来ず、体力向上のためにもあまり機械化されない方が部

員のためには良いのではないかと思っています。

次に各馬の現状をごく簡単に書いてみます。と、北京、新馬、フリ毛、九才、前近の如く伝食の疑いあり、やせ気味で消化器弱し、又人馬転で名高く、よくけがしたりさせたりする馬。

北翠 相変わらずセカセカと元氣あり馬手馬大

会の穴馬優優秀選手を産む馬、慢性飛節軟

腫

北嶺 阪古参馬で高令のため本年展全日本

国体の六段中障で往年の馬力出す取返、時

々知痛を起す。

北嶺 相変わらずかんだり、けつたりの傷醫前

科犯で新入生にとってやっかいな馬、馬場

馬術用として今のヒコる最高、鞍ワラを汚

さないこと足評あり、時々腹帯擦傷を起す、

朝清、少しおやせになったようです。馬場で

乗ったま、交代しないと逃亡を計る、蹄又

病癒治療

北楊 北鹿毛、九才、新馬、目下調教中、体に異常なし、満京馬。

北翔 北鹿毛、北楊と同次日高の北大実験牧場よりの新馬。同じく調教中、本郡で取も小柄ながらピリリとからい。夏季にたてがみ皮膚炎を起す。

北颯 取も新しい馬、青毛牝、六才、サラ系、道管完馬より部頭のアルバイトで買った馬、取もスマートで入なつっこい、将系が榮しまれる。なんどしメンコイ馬です。

オニ部

馬体管理について

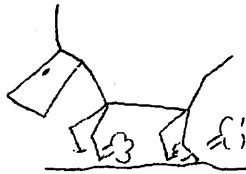
現部貞諸君の爲に日幣必要とする知識を少し記してみる。尚七日に発行された「蹄跡」に記載されている事項は除く。

まず飼料についての一般的知識を項目別に上げてみると。

エンバク 昔から馬にはエンバクさえやっ

ておけばいいという思想があるが、これは一般に背けることで、これはエンバク中のアミノ酸組成が馬に適當であることから求めている。どの上エンバクの良い点は馬が最も好み、鹽度の識維を含み、消化が良好で、種格が割合安撫であること、尚全粒のまま、与えるヒフ

ン中にとのま、出るのとがあるのぞ、ひき割にするか、米糠、馬も好んで食べ、熱量



水漬して与える。源としてモトモロコシに匹敵する。尙鹽度のカルシウムを手えないと骨軟症になるから注意する。脱脂していいものは腐り易いので貯蔵に注意を必要。フスマ、軽く採種があるため馬の胃腸に適す次に粗飼料であるが、これはエンバク等漬

厚飼料より栄養価は低く、粗繊維分が多く、
蛋白、脂肪に乏しいが胃の容積を充す役目
をしたリビタミン類を補給したりする必要
なくべからざる飼料。今日では採草類の乾
草では穀類よりもむしろ栄養価の高いもの
もある位である。

乾草 馬が最も好むものはチモシー、オ
ーチャードの祇な干本科牧草であるが、こ
れに適度の豆科牧草（ルーサン、レンゲ、
クローバー等）を混ぜたものは最も良好な
ものである。特によく日光に当てほし上げ
たものはビタミンDに富んであり、冬期、
特に北国では腎臓症予防のための重要な飼
料である。尚ビタミンAは日光乾燥による
乾草には破壊されて、ほとんど含まれてい
ない。

デントコーン、これは元素サイレージとして
牛に給与するものであるが、青刈にしても
又乾燥にしても馬には割合良好な飼料で特

に青刈のものは甘味があるため、馬は喜んで食
べる。尚多給すると下痢するから注意を要する。
生青草 熟産源としてはエンバクカリも位で
少いがビタミンA、B、Cに富み、又カルシウム
も多量に含むから重要である。特に部奥の労
働のみで得られる飼料として体方増進と共に一
石二鳥の好果を草刈りは持っている。

ワラ、これは飼料に入れるべきでなく、徒ら
に瀡腹感を手えるのみで消化に要するエネルギー
の方がそれによつて得られるエネルギーより
大きい位であるから馬に糞ワラを喰わせない程
に注意せねばならない。

次に馬の健康状態維持を外科的立場から見
て、日頃よくいさあたる事項について、ニミ。

創傷（普通の血の出るケガ）軽い場合は単に
ヨードチンキ、マーキエロフロム液、ペニシリ
ン軟膏等を塗りガーゼをあて包帯をまけば足り
る。

蹄又齧爛 腐爛した部分を充分に削り取り、

コードチンキ塗布・木タール綿を燻乾して包帯としておけばよい。慢性化したものは覆面を容易に治らないが、常に履合を清潔にし、乾燥状態におくべきである。又過度の削蹄を行い、過度の延長を防ぐ。

跛行 跛行の診断 まず跛行している肢を決定し、次にその部位並びに原因を診断して治療に当る。

これは非常に複雑で紙面が許さないので夏季合宿等に詳しく講習しようと思っている。以上浅学ながら大きな甲を習きました。小生の出来る限りつくしたつもりです。

最後に作業簿における部員諸君の協力を感謝します。

「北糶号調教日誌」より



恩田正臣(技術主任)

北糶号の略正

生年月日 昭和三〇年五月六日

産地 静岡県静内町

父 サラ・キンクライト

父 サラ・タイオライト
母 サラ・銀勝

母 中半・前山

父 重半・凱歌
母 中半・初慶

昭和三十六年十一月十四日

北六馬術部観合へ入厩す

十一月十五日(晴)

朝餌付の前、厩舎より引き出し、手入れする。セオであり、競馬に扱われていたので、フラッシュにも驚かない。足の上げ方も上手で、手入れのされ方を心得ている。

左首に断肉注射の跡が、やゝかたい凸がある。

左腰に馬鞍したか、貨車輸送中にやったか
揚跡がある。性項は非常に温順で癖は認め
られない。

十一月十八日（曇）

調馬寮四十五分。大分上手になった。速歩
運動を長い間待読しても反抗せずに運動す
る。手綱に支点を求めて運動しているのを
感ずる。

十一月二〇日（晴）

調馬寮で障碍練習。踏切にレンガ障碍のフ
タを挟い高さ五〇cmの単一。飛び方は落っ
て、良く見て飛ぶ。低い障碍では、速歩の歩
幅を広げてまたぐ程度だったが、高くしてか
らは、障碍の前で速歩をやめ、両前肢で同時
に踏切り次いで後軀をそろえて踏切り、障碍
の上では体をのばし、前軀をそろえて着地す
るといふはッミリした障碍飛越の体勢をとっ
て飛んだ。

十一月二十一日（曇）

鞍を置く。鞍初鞍を取りはずして運動した
後、鞍を鞍につけ、次には鞍をだらりと下げ
運動につれ、ゆれ、首を立て、体にふれるよ
うにしたが、少しもいやがらない。競走馬と
して一応調教を受けていたからだ。

騎乗す。手綱をひかえ、拳を一定にし、前
傾して膝の圧迫で推進し、首に屈撓を与えた
衝に重くかゝってきたが、時々自分でかんで
首を下げ軽くなる瞬間がある。これを捕読さ
せれば良いと思う。速歩では頭を上げて来て
それを矯正しようとする。衝に重なる。

十一月二十五日（曇）

稟直な姿勢で歩かず、右肩を出すようにし
て歩く。従って右衝に強くかゝる。一歩生を
初めて乗せる。温順しい。

十一月二十八日（雨）

常足で右巻乗をくり返す。右肩がどうもか
たい。左巻乗では上手に行い、内方脚を強く
使うと料禰歩まで出来る。前肢旋回も一方の

み上手だ。右肩を入れるために、右巻乗と、
右駈歩を意識して行う。

十二月一日（晴）

練習中目標にした事がどうしてもうまくい
かず、くり返せばくり返す程、悪くなるよう
な気がしてくると泣きたいような気持ちになっ
てしまう。このいう時には懲戒をせずに、そ
こで練習を終了するのが良い。馬は馬自身の
稱造的・心理的条件の下で運動しているの
であるから、こゝで懲戒したら、馬は何の理由
で懲戒されたか理解できないので懲戒の意味
がないからだ。

新馬を調教しているヒ、忍耐すること、反
省することを経えず要求されるので、調教者
の人間完成も同時に調教される。

十二月五日（晴）

何よりも馬場の悪いことが調教の進行を妨
げている。馬場が悪いために馬が足もとに注
意力を集中しすぎているので、扶助に対する

注意力が不足しがちだ。今日より調教の補助
として二軍生を乗せた。

十二月八日（小雪）

毎日一進一退していながらも続けて行って
いると大分良くなるものだ。そして調教はさ
、やかな進歩にも漸進して愛撫を与え、更に
高度の進歩を目指すようなゆとりある気持ち
で行うべきだ。約三週間たったわけだが、前日
と比べたら目立ってなくとも、教日前、教週
同前と比べると、はッキリ進歩した点がわか
る。

十二月九日（曇）

三〇分の順備運動の後、障碍練習。

レンガを踏切明系に置き、単一の高さハ〇
から飛越。障碍に真すぐ進歩で向け、馬が
障碍に突進しようとする気配が見えたら巻乗
し、再び向ける。又、歩度が変われば又巻乗し
て馬を落つけ、充分沈滞して、良く障碍を見
ている時のみ飛越させた。それでも飛越後、駈

歩にぞてしまふ。しかし、ぞれ程強力にひっかけるというものでないから、普通の際に強引に抑えるような事をやっつては衝受をこわし馬が飛越をいやがるような結果にもなりかねない方法を打つことはないと感ふ。飛越回教十二回、最高一丸。一丸は初めてであるが、積木の上をかなり余裕をもって飛んだ。低いのは馬が注意をするために上手にとぶ。障碑の調教は一週間に一度の割合で行うことにしている。今までの所踏切を示した単一とササ障碑で練習している。馬場が悪いし、障碑の飛び方を調教しているのであるから、一疋を慎重に飛ぶことに留意し、連続しては飛ばせない。飛越の回数も一日十二、三疋と限定している。

十二月十二日（晴）

外乗す。初めてではあったが、自信があったので先頭をひきうけた。純血統の血が入っているにしては非常に落付きがある。物を見

て驚かず、車とすれ違ったり、直越されてさえもぞれ程動じなかった。又信守待ちの周りと停止させておくには努力を要した。円山公園で競走をした時には、他の馬と三〇米位のハンディをつけても、懸命に走っている群を束にして追いぬいてしまった。この時ばかりは兎走馬の本性をとりもどし、衝にガンガンかゝってくる。しかし、ひっかけてさせてそれをとめる自信はあったので思い切り走らせた。林の中を走り、山道を登り煤煙にけむる札幌市と雪化遊の石狩原野を眺め、又雪壁のきれめから顔をのぞかせた夕日に浮き出たれた手稲を仰ぎ、遠乗りの気分を満喫して帰された。

しかし新馬に比べて三時間の外乗はきつかったようであった。帰りの街中の行進では疲れたと見えて、頭をさげ巻込み衝に置くかゝってきた。

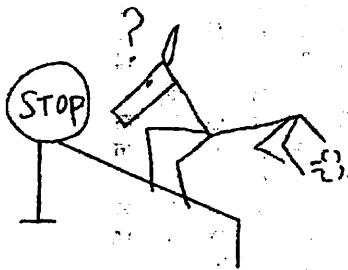
十二月十五日（晴）

自分の判断で一平生を乗せた。以前にも乗せていたので、それ程里犬に考えながったが、ひっかけられて馬場より飛び出し、線路で人馬転倒し、人馬にケガをさせてしまった。幸いどちらにも重傷ではなかったが、どちらに対しても与えた精神的な影響は大きかったと思う。深く反省し、改めて、自分は、新馬を調教しているのだと意識した。

十二月十八日（曇）

部員総会で新しい名前をつけてもらった。北海道の地にある北大馬術部の馬であるところから北と、かって、木障研で活躍した北標号と体形、毛色が似ているのみならず、かの馬の、北大馬術部における位置をこの馬がこれから継ぐことを考え、その昔をやすりうけ、そしてその精神を承かネオレソンの血とスタールに乘馬であるところから強（つむじかせ）という文字がびった。

りど、自分が提案した「北標号」に多くの賛意を得て決定した。
北標号よ、名前のように、はやての如く、活躍し、勇名を全国に響かせよ。



「北大馬術部三十年史」

編集を終えて



——馬術部生活への反省——

三浦 清一郎
八軍史編集委員

編集紙の本を手にして今手は暮れるのだ、
師走の慌たぐしい風に吹かれて、今日は最後の
校正刷りを印刷所へ運ぶ。日々の全てに於
て、新しいものを創造することは、いつの間
にか、自分の生活の土台であり、喜びになっ
ていた。徹々たる活動だったかも知れないが
一年半の時間は永かった。やっとできるのだ、
一つのもの——新しいものが主れる喜びを爽
感するのだ。一年半の馬術部生活の一つの結
着がここに在るのだ。大小様々な笑った時間
捨て去った機会に値するものを俺は自分のも

のとしたい、少くとも俺には、それが生きる
ための糧であり、又まきること、それ自体な
のだ。

現実の活動の中では、吉田、大場両先輩を
始めとする杯々な人々を知り、そして尊敬や
愛護や、反抗や、怒りを感じて、喜び、取
壊し、憎み、軽蔑した。與体的な編集活動は昨
年の五月から始ったが、当時の吉田副将に呼
ばれて、三十年史発刊の話をかされた時は
殆んど白紙の状態であった。仕事は乗鞍依頼
から始まって、十年史の反省、まとめなどと
全く遅々として進まなかったが、「何か（い
つか、どこかに）喜びがあるのだ」という期
待と、羨望感とに引きずられて、是りがちな
自分をせめてて編票を手伝っていった。ぐ
ち屋の俺はよく泣き争を云って吉田さんを困
らせたものだったが、三月までの十ヶ月間、
吉田さんと二人での、追っかけられていろよ

うな活動は懐しく思ひ出される。自分の接したあの深い副将の、緻密な計画性と蒼白い炎のような情熱とに魅かれ、讀歎し、その実行力を學んだ。

しかし我々の編集活動は部内の活動から、何か浮き上ってしまっていた。三月に、吉田さんが筆袋を去って、大場さんに仕事を引き継がれると、自分はどのたくましい活動の中で、情熱や意欲を見失ひ、大場さんに尻をはたかれて、どうにかこうにか、六月に原稿を一紙まじめ上げることができた。だがこんどは発行する金がなかつた、多大な資金が入用なのは解っていたのだが、何か資金集めに因する「甘さ」があつた。それがこの師走にまで完成を引きのばした。杯々な活動に対して科学的な觀察や反省が重要なのはもちろんのことだが、この一文に替くには、余りにも「完成した」という華突への感慨が深すぎるといふ気がする。

しかし、この感慨の中でも現在の時点に立って考えれば、編集過程に於ける杯々な貴重な体験の中でさえも、自分は柯と多大な貴重なる「時」を失つたことだろう。わがままな云い草ではあるが、編集を始め一ヶ月もたつと、自分には創造の喜びなんかこれっぽっちも感じられなくなっていた。筆袋は一つの正史。晋。でしかあつた。三十軍目に発行される、一つの報告書なのだ。教人の人阿の手になる、華突の羅列にしかすぎなかつた。そこに自分は創造の喜びを見出し得なかつたのだ。自分を満らすに云えば、集まつた原稿の山には掩の探し求める日々の糧はなかつたのだ。

浪人を終えて、北大の門をくぐった時、ここにこそ俺の青春があるのだ、と突感した。新しい意欲と希望に満ちた世界が広がっているのだと夢みた。芸術の美や、読書や、スポーツの自由な活動の中で、自分の人間性をより

置かな、調和したものに発展さすべく、意見を溢れていたのだ。

しかし多忙な日々が一撃で夢をぶち壊した。馬術部生活を一人前に送るためには、池の活動との両立は、殆んど信じられなかった。(自分自身両立を計って、華実失敗もした)

だから自分は部内の文化活動たる羊災の編集に夢加。させてもらった。だからそこに活動の善びがなく、求める糧がなかったからといって、活動を停止することは、自分の荒地もあつたし、部内の空気がそれを快しとしないだろうという恐れと義務感も手伝つて、ずいぶん苦しい日々が続いた。このように自分の活動の土台は悪地と義務感と編集にたずさわる両先輩のはげましと慰めと慰めと憎悪とであつた。このようにしつかりと自分をつかむこともなく、時折の馬に接する善びとスポーツの後の疲労感の快さどにひかれて、習慣的といつても過言ではないような部生活を続け

た。しかし千葉さんを初めとする二、三の影の援助と激励と、大場、吉田両兄の努力が前述のように六月になつてどうやら一つの形を持つ成果を生んだ。夏休みを迎えて、現役では志木、原西兄を中心に、在札のBでは青藤先生を中心に資金の獲得活動が始められた。両マネジャーは東京の先輩諸兄及び紹介していただいた教々の商社をまわり、青藤先生の方では在札のBを除く全国の馬術部卒業生に三十羊災発行のための援助をお願して下さつた。活動の中心となつて勤めて下さつた人々はもちろんのこととして、羊沢先生、松本先生、在東京のB会の樋口先輩その他多数の人々の広い御援助に深く感謝の意を表する次才であります。こうして十月末に、印刷にさせる体制が整つた。原稿と金を渡して、大場さんと二人で帰る道は初冬の冷えびえとした風の中で何と晴々と輝しく続いていたことだろう。今ここに僕は師走を迎えた。雪の都の暮

れ方の通りに完成の喜びを夢みて立ちどまる。これは曲りなりにも、創造の喜びであり、義務を全うしたという感慨でもあり、又荒地を張り通したことの誇りでもある。

今は静かに喜びと虚脱感の中で潮息を渡らす日を待っている。それはミッと明るく喫茶店のすみでコーヒーをすゝりながら、又の「明日」を夢みながら……。

北大馬術部三十周年編集年表概略

35.6 / 原稿依頼開始

35.9.30 中野友二郎氏のオ一号原稿到着

35.10 オ二回原稿依頼

35.11.26 乗園英文氏のオ七号原稿到着

35.11 三十周年発行に関する印刷所見積

依頼

35.12 原稿依頼

36.2 原稿依頼

36.3 原稿依頼

36.3.4 在札部員広告依頼活動

36.5 原稿依頼

木暮原稿の編集委員代筆

36.6 札幌印刷部（函穂印刷所内）に印刷

依頼するも、費用の半金を前金のこ

ととて原稿持ち帰り。

36.7 三十周年発行費用獲得活動

36.9 原稿最終整理

36.10.28 原稿提出・総版開始

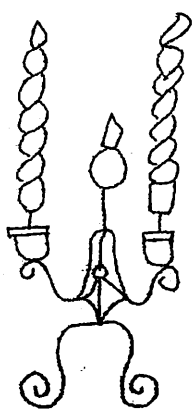
36.11.11 オ一回ケラ割り校正（一部）

36.11.17 オ一回ケラ割り完成（全部）

36.11.20 オ一回校正完了

36.12.3 オ二回校正完了

36.12.15 最終原稿・「編集後記」提出



北大馬術部に於ける

文化活動について

三浦清一郎（二年）

初めに、機関紙に発表した意見と同一であるが、再びニ、に自介の文化活動についての考察と主張とを述べ、その後批判の項で更に更に自介の意見を再確認して、創刊号の統一テーマであった。主張。「馬術部に於ける文化活動について」のまとめとしたい。

並たいていのことでは、スポーツを中心としたクラスに、独自の文化活動が起るといふことは有り得ないことだろうとは容易に想像できる。それが特に北大馬術部のように、共通の趣味を持った者の集まりから始まって長い歴史や、伝統が、単にクラスの活動が趣味性のみを終ることを評さなくなってしまう

た運動部、即ち試合に於ては常に勝利を要求し、又部の運営に於ては、くちばしだけのつっこみは許さず、全人的な影響を及ぼすにはおかないような運動部。どういふ地盤の上に芽生える文化活動の前途は、まさに多岐多岐の一語につきるだろう。

解り易く分析して見れば、
オ一に

活動の担い手である部員一人、一人が天々部運営の担い手でもあり、又送手候補生でもある。このようにスポーツ活動の面に於てすら奥に多忙であり、疲れ切ってしまったている。

オ二に

部員夫々が文化的趣味、案度の点でまさに多程多杯であり、かなりの相違点を持っている。それを一つなり、二つなりの活動に吸収する困難さも又容易に想像できるのである。

オ三に

文化的活動の一つでもある、その平等性、対

善性が、運動部に存在せざるを得ない上級生
下級生の関係によつて、少くとも外面的・形
式的には多少の阻害を受ける。それは文化活
動が最も根本の興趣とする、表現の自由・言
論の自由等を、考慮や、疑がねやに依つて、
無意識のうちに阻害する。

その他、会合の場所や、資金や、シーズン
中の合宿や、持練や多少の障害もあるが、そ
れはどんな基盤の上に立つ活動でも同じであ
つて、前述の三項が最も重要であらう。

それでは何故、そういう地盤の中から文化
活動への要求が起り、その一歩への試みがな
されるようになったか、これも我々が冷静に
考察しなければならぬ問題である。

文化活動の起因に關する最も根本の問題は
我々自身の貴重な学生時代・青春時代が、学
校の講義とスポーツ活動・マージャンとテン
ス、そういうもののみに至ることを許さない

ということである。或い方を要えれば、我々
自身の魂が突に杯々なものゝ要求する。しか
もその全人間的な自然要求が不幸にも（幸い
にも？）馬術部というワフ。を越えてゐる場合
我々はスポーツ活動のみには決して留つては
いない。或る者は自己の要求を押しつけて
運動部と訣別して退部するだらう。不幸な奴
ではあるが、一面、自己に忠実な、勇氣のあ
る奴である。又或る者は寮やクラスや、その
他の文化活動に参加して、馬術部活動との両
立をはかろうとする。又或る者は自己を欺き
自己内部の発展を切望する部分にとつてはむ
く。どいつの生活の中の文化活動への要求は
諦めと虚無と墮性の日々の中で消滅する。最
後に最低の奴へ少くとも自分はどう評価する
か）は人間的成長への要求も感せず、持ち合
せてもいない。しかしこのたぐいは北大馬術
部に於ては存在しないであらう。

多くの部員が（少くとも自分の場合は明ら

かにどうであつたが、前記三つの型の人間の心境を自分自身の中で体験してゐるのではないかと思う。

こうして我々は返部したり、他の活動との両立をはかったり、又契には諦めと個性とのうちに上級生となり、多忙さの故をもつて、文化活動への参加は不可能となり、又要求とれ自身が破れた風船王のようにしぼんでしまふ。こゝで彼は、豊かな青春への道を放棄する、怠慢と飛走芸習の故をもつて、自己内部の要求を放棄し、その追求を断念することは、契に不幸なことだと思う。

以上のような経過を経て我々は才四の考えに到達する。

即ち、文化活動を求めて他のサークルとの両立をはかった人間は、両方の活動が共に中途半端な、良い如城のものになるか、又は片方が捨てられて行くという事態に直面せざるを得ない。他のクラス活動との両立をはかっ

て、しかも、まどしな部活動を行うには、北大馬術部はあまりにも多忙すぎるからだ、こうした行き止りを体験した人々は才四の方法に依らざるを得ないのである。即ち部活動の中に部独自の文化活動を求める以外なかつたのである。しかもどの文化活動はスポーツ活動と決して対立すべきものではなく、まさに相互補完の役割を背負っているものと思う。馬術部活動のオー線に立つ人々が、つまらぬ疑問やフラストレーションにとらわれることなく、日々を送るために、こゝで文化活動は求められ、創設されるのである。外見上、形式的にはスポーツ活動が主であり、文化活動が従であるが、――どうならざるを得ないが――内容、精神的には対等の位置を保ち、活動する我々自身の主体、自我への強力な支えとならなければならぬ。このように、文頭に記した幾つかの困難を克服してこそ、馬術部活動の、フク内のみには住めない人間は、部独

自の文化活動を創造しなければならぬのである。しかしながら自分は、決して文化活動の創造に關して樂觀などしていない。むしろ文藝で二番目にあげた西遊、即ち部員相互の文化的基盤が堅うという点で、極めて悲觀的に考えている。だが文化活動を都内に創造する以外に我々の行く道はないのである。たゞ努力があるのみである。

それでは、僕がいう文化活動の内容はいかにあるべきかという方向性の問題、そして我々ほどのように対処して行くかという問題、時間の配分等々様々な具體的な問題にここから離れて行かなければならない。

○活動の内容

形態上ではあつても、スポーツ活動に従属するということば、文化活動に或る程度の制限を加えるということば疑いがない。だから高度な活動はできないかも知れない。しかし、より高度なもの（より価値あるもの）への前

進への姿勢）がなかつたら、どんな文化活動にぞくぞくうえであり、一番の茶番劇にすぎない。馬術部活動が常に勝負たるべき前進であるとは全く同じくして、そこに生れる文化活動も常に真・善・美の融合、調和した、豊かな人間性へのたゆまぬ前進でなければならぬ。前進せぬ（前進への意欲と姿勢を）ため活動は、事実存在することだし、多少の意義もあることだろう。そして、そこでは親睦とか、レクリエーションとかが求められ、又与えられる。

しかし、我々が欲するのは、そんなもののみではない。前進が意識されず、戦いが意識されない文化活動なんか、馬術部の多忙さや困難さとの前にすぐ壊滅してしまふであろう。我々の文化活動への欲求は、いわゆるリフリエーション的なるものを越えている。我々は官介達の手で生み出す新しいものを求めている。創造する喜びを求めているのだ。

前進への意識。これこそが活動に参加する人間が自覚せねばならぬまさに重要な問題である。

話を具體的な活動内容に移そう。

そのオーは、部員相互が自由に意見を発表する場所としての機関誌の発行。活動の場所も、資金も、人間も最も容易に手に入り易い文化活動へのオー歩である。活動への城砦として、がっちりとは有糸の意識が、この土台を支えなければならぬ。その他合唱面活動、演劇活動、読書活動、学習活動、専ら我々に与えられている機会には豊かすぎるくらいである。そして、いかなる活動に於ても調和した豊かな人間性の追求こそがどの根本とならなくてはならないだろう。

二、時間の配分、その他

あくまでもスポーツ活動の中の、文化活動であるから時間の配分の問題は非常に重要な位置を占めてくる。定期的に活動する必要性

と、定期的活動を阻む条件との矛盾は我々が負わざるを得ない困難である。機関誌に關しては月一回、二回の定期発行と特別な行頭問題等が起ったときの臨時発行と二つあるだろう。当然のことながら編集は責任持回り性にすべきであろう。又合唱、演劇等の活動に關しては、できるだけ、具體的な批評、批判を要するべき対称を求めて、発表する機会をつかんだら良いと思う。読書活動、学習活動等の成果も、当然のことながら、機関誌その他に発表し、受批判と前進とかなさるべきであらう。又、部員一人、一人が私的生活、公的生活を通して、様々な活動の過程に於てのみ解決されて行かなければならぬし、解決し得ぬ時は活動が挫折して行くのみである。

三、活動への組織

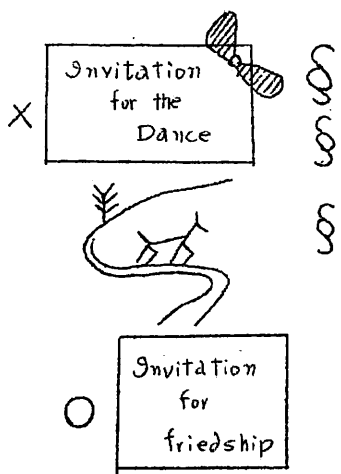
活動の中心となる人間は、あたりまえのことだが、最も文化活動への自己要求が強い人間がなるべきである。その人間自身が、日和

ったり、怠惰な性格だったりして、文化活動が起り得なかつたり、起った活動が消滅したりした時に、その原因を、専術部の運営方法の拙なさや、上級生の責任に帰したりするのではあまりにも惜なく、兎告しい。しばしばこういった気分を自分は部内に感ずるのである。活動の生命はまさに組織であり、意欲ある活動家であると思う。指揮者がいなくなると活動は分裂する。再び虚無と惰性の日が始まる。意欲ある人間は決して倒れてはいけない。活動を組織する人間の自覚と努力の重要性を用い知るべきである。

この他、活動の場所、資金の問題があるが、場所に関しては、部室や、寮や夫々の下宿があるのでも、それほど問題にもならないだろうが、紙代等の活動資金の面は各自有志が負担すべきである。

これで自分の、専術部に属する文化活動への意見、希望をのべ終るが、冗長にすぎ、又

云いたりなかつた部分もある。平直な部員諸兄の反論・批判・修正をお願ひする次第です。



老女は死なず

たゞ去りゆくのみ

萩原種典（一耳目）

お前はあまりにも年をとりすぎた。

それにあまりにもエンバクを食いすぎる。

あのすばらしい跳躍と

飛ぶような速さは今は見られない。

輝く戦正と勲功は過去のもの、

だからお前には用がない。

お前に与えた愛はその場かぎりだ。

ふん正義感がなんになる。

俺は癖善のかたまりだ。

そんなに悲しい目をするなよ。

車を引こうが、かんづめになるうが、

俺の知ったことじやない。

若い新馬がきたのを知ってるかい。

真黒いサラスレンドが、

温順しいが、怒ると数億倍の力を出すんだ

よ。

こいつがお前の縄張りをおかしたんだ。

これからこいつの世界だろうよ。

お前は紙切れにすぎないんだ。

それに金の匂がぶんぶんする。

俺を憎んじやだめだよ。

お前のよぼよぼにがまんできないし、

こゝは養老院じやないんだ。

此の世はお前に住みにくいんだ。



街乗

さくもなみだのものがたり

水野拓亮(一軍目)

12月12日 天気晴朗なれども雪少なし。これじゃあ鉄さいがすり減って部の財政上良くないと思われたが、街乗に行く看にとつてはそんな事に構っちゃられない。これぞ日頃の精進のお陰と、鬼気揚々として出発した。構内の中央の道路を通過してクラーク会館の前あたりで、ぶらぶらしている学生を見下ろし、はかない優越感に浸りながら通りすぎる。その後ほだいたい踵歩で行った。いつもの手だが、前歩の時は丁度よかったはずの鍍が踵歩になると、長すぎて足が浮いてしまう。一、ニ穴短かくしたが、それでもやはり浮いてくる。面倒くさいからそのまゝにしておいたが、これがいけなかつたらしい。植物園から西に折れて一行七人と七頭は一路円山へと

進む。列の後の方から先頭のサスのチーフに「北星へ行きましょう。北星の運動場を乗りまわしてみてえなあ」と北星経由賛成ノシなどとなかなかうるさい。先頭は雑音に耳を貸さず、たゞ円山へ円山へと馬を進める。僕は北嶺に乗っていたが、あの体をねじって放り上げるような反動に身をまかせ、一步一歩に上がったリ落ちたりをくりかえしていたら、腰が気持悪くなってきた。「馬に酔う」という言葉は聞いた事がないが、そんな事もあるのかなあと思いつながら、すぐ後で北嶺に乗っている田村さんに窮状を訴えると、軽踵歩をとるように教えてくれた。なるほど、軽踵歩をとったらちよつと楽になったが、こんどは腰が痛くなった。夏の合宿では大場さんに「ひぐの三点騎乗」と冷かされた程、はぞに際りむぎ、11月の持線でもむいたので、今度こそはと思いい、トクノンのニ倍ぐらいの洋剣齎を両膝に貼ってきたのだが、それでもまだ小

さすぎたとみえ、はしっこからめくれてきて貼らないよりも悪い結果になってしまった。膝が痛いからといって軽歩をとらなかつた。腰と腹がおかしくなるので、やむを得ず、膝をできるだけ固定して軽歩をとつた。まもなく円山公園へ到着、こゝで朝漕に乗った。君に朝漕を神さえてくれと頼んだが、〇君ニヤニヤするだけで相手にせず。そこでサチーフが「丁、お前朝漕の上からでも出来るって言ったじゃねえか」と同行の一人の女性と六頭のは顔を赤らめておりました。丁さんの再三再四の懇願に〇君どうやら承諾したらしい。というのは僕は僕で北嶺を相手に番斗中でした。今まで列を組んでいた時は、両隣をあけるなと何度か注意されつゝも、何とか動かしてきたが、公園について、さあ自分一人で動かそうと思つても、どうにもならない。脚で正直し、拍車を入れ、何とかかんとか動

かそうとするのだが、せいせい軽歩で、今まで振れているか。たてがみが振れだすくらいのも。速歩にもならない。部屋のはねに北嶺は余り狭うなと書いてあつたのを思い出して、こりやあもうばてたのかと心配になつたり、いやあれだけはかりの軽歩ではあるはずはないと思つて又何とかやってみるが、さっぱり動かない。そのうちに腹がたつてきて、「こゝろ畜生」と思つて拍車を入れてもやはりだめ。ひっかけられないようにと思ひ小さくて余りきかなどうな拍車を送んで惜りてきたので北嶺は何とも感じないらしい。しまいに人阿の方がタロツキになり、いゝ畜生、勝手にしろ」とあきらめてしまつた。すると北嶺、雪の間にどろどろを露を出している音耳めかけて、このこ歩き出さまうたく濟けなくなつてきた。そのうちに軽歩、軽歩を充分楽しんだ他の人と列を組んで林の中を速歩で進み始めた。先頭は木々の阿

を右へ左へ縫うように駆けて行くが、僕はそんな事をしたら危くてしょうがないので、最短距離を真直ぐに行く。その林を抜けた所に阿山の総合クランドがあり、そのクランドの外側の道で兎馬をやる事になった。北嶺は走れるの心配だったが、他の馬が走り出すと出るは出るは、ぐんぐんスピードをつけてきた。ところが、途中で股がはずれて、それを履いている向にピリになつてしまひ、履いたと想つたらもうゴールだ。こんなに短いなら直すんじゃないかつたと想つたが、後のまつり。その後荒井山スキー場で馬を下り、他の人が今の競走について話している時も、僕は口を出さず資格なしと自認し、雪辱の機会を与えられる事を秘かに願っていた。その附近の店で一本30円ばかりのコーヒースキ乳とりんごをおごつてもらひ、これをコーヒースキ乳をオゴつたぞと喜われ、りんごを馬と半分ずつ分けようと想つて先ず一口食つてから北嶺

に差し出すと、あの大きな歯で大部分を食いちぎられて、残つた少しばかりを食べる気にもならず、残念ながら全部やつてしまった。その後直新のカメラマンに頼まれて雪のほとんどない荒井山スキー場に馬を乗り入れ、ポーズらしくないようにポーズをとってカメラにおさまつた。そこから又林の中の道を通つて南の方に行き、坂を登り切るとすぐ目の下にスキー場らしき所を下り始めた。深平合戦のひよどり越えや、七人の持などの気分で行くと、雪の中から、とごろどごろ大根の折れたのが見えた。すると下の方から盛んに怒鳴る声が聞えた。こゝを下りて来ちやあいないと言っているらしい。こゝはまだ大根畑にしていたのだ。そこで我々はすごとと引き返した。七人の伴はやはり百姓よりも弱かつたのでした……。又先ほどのクランドへ来ると兎馬をやることになった。よし今度こそはと思つたが、チーフがフスタートノレヒキ

っても一軍目の悲しさ、池の馬が走り出さな
 いと北嶽嬢走り出してくれぬ。それでもま
 め快調に走り出し、前の馬の蹴った雪のかけ
 らを頭に受けながら走った。今度はいゴールの
 所に高さ50cmくらいの棒が二本、丸く丸く
 いの巾で立っていて、走る前に、その前で必
 ず止めるようにと注意されていた。ところが
 今度は止めようと思ってもなかなか止まらな
 い。仕方なしに、棒と棒の間をめがけて行く
 とすぐ右うしろに北嶽が走ってきて二頭がぶ
 つかって倒まって棒の間を通り始めた。その
 後ようやく止める事が出来たが、口もきけぬ
 ほど痛かった。北嶽とぶつかった時、鞍につ
 くべき三点の内、前の一点に危敷且つ強大な
 ショックを受けたからである。しばらくは
 足に全然力が入らず鞍の上を右に左に揺れて
 いた。結局四匹で、雪辱とはいえないかったが
 始めて思いきり走って痛快だった。そして又
 公園を通り、植物園を通り、厩舎へ競争到着

したが、余り競争すぎてちよっと物足りない
 感もなくはなかった。

これアオやお手やわらかに



…牧 電子

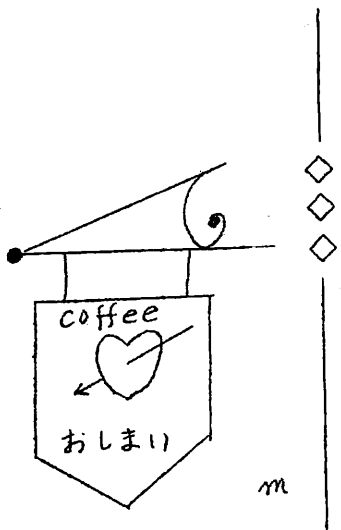


当然の事ながら、馬術部の生活は一軍目の
 私にとって初めての事が多く、未知に対する
 期待と不安の念でいっぱいでした。落着きの
 ないのはその為ばかりでなく、私の性格から
 も采るのでしようが、鹽介とポコイ手をして
 しまいました。

夏の合宿（二回目）の事でした。私連は大
 場さんの御指導の下にスターバルを行いました
 た。コースは、馬場をスタートして豚小屋の
 横を廻り、ポスラ並木を通って放牧場に抜け
 馬場に帰ってくるのですが、私には鹽介長い

コースのように悪われました。途中に障礙が三つ置いてあり、更に馬場に戻つてから余力を喚ぶために六回程の障礙を飛越すのです。私は最後の方で北斗に乗り、馬場を出てすぐ鉄道線路を渡りました（一年目だけコース変更）。此所で前に障礙があるせいか、少しゴネられました。どうにか並木に出、放牧場へと向いました。この間の場所は馬で駈けるのに賢者が良いのですが、私はまだ、放牧場から先のコースには行った事が有りませんでした。その方が賢になり、あたりの景色を眺める余裕もありませんでした。放牧場の入口まで来ると、へもちろんこれは後になつてわかつたのですが、北斗は悪に止まらしてしまいました。板はちゃんとコースを覚えていたのです。私はそれと気付かず、無理に馬を出して、隣の牧草地に入りました。途中二夜程北斗の反抗に遭いましたが、悪戦苦闘の末、小川の所まで行きました。が、どこ

を見ても橋が見あたりません。それでようやくコースを間違えたのに気付かず、引返ししました。北斗はヤレヤレ手数のかゝる人だと言わんばかりに駈け出しました。



動機

なぜ?
ナゼ?
何故?

why?

— 柯故馬術部に入ったか —

御坊田 賢一(二年)

たしから月の禾だったと思えます。北風の
強い音がようやく過ぎて、春の名残りのアカ
シヤの白い花が、ボスラ並木に散っていた頃
はくは初めて「馬」というものに乗りまし
た。何か入学の喜びが扱けされず、といっ
てどういつまでも垂んではいられないとい
うあせりどが、いりまじって、ぼんやりと
終日過ごす日が多い日々でした。

そういうある日、花菱面長の本岡さん
から馬に乗りに行こう、とさざわね、それ
で乗ったわけです。馬といっくも、馬術部
のではありません。競場のオニ勇で、も
ちろん裸でした。

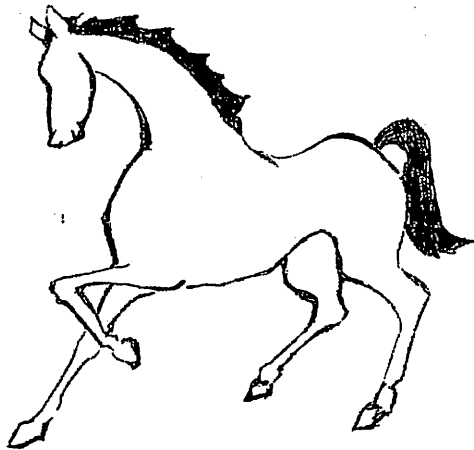
はじめはおっかなびっくりで、たど
とコト

コボスラ並木のはずれまでいって帰って
くれたけでした。すべてのものが、夏に
向って燃すいていました。ボスラの乗
も、競場の稲も、その甲を、初めて馬
にのって……何
か、こうぼうとして、夕日に輝いた手
稲をながめ、馬を進めて行った時の気
分……一生忘れられないと思っ
ています。

こんなことが二、三度あつて、馬に
対して興味がわき、といつてもほくの
場合、単なる少女趣味的興味だっ
たかも知れませんが、よくボスラ並
木に散歩にいらつては馬を兜に行
つたものでした。そうするうちに、夏
休みになつて、その間に一学期のこ
とを考えて、何か自分にも、目標が
つていふか、よりどころのないもの
がなかつたように思えてきたんです。
高校時代は一応入学して、毎日危
険に過すわけですが、四月に入
学して、毎日危険に過すしてしま
った日々を考えて、何かやるう
と思つていました。

これが入部の勅機といえは、勅機です。入部したての頃、振動がないっていふんで、北翠に乗っていつも手入れの時、おっかなかなか手がなつかしいです。一回あんまり動かすで困っていた時、上級生の人が、前にまわって、じっと馬を顔を見て、馬をひっぱたけて言われて、その通りしました。その後ぼくが近ずくと、すぐ耳を倒しますので、あの時の手をまだ思っているかなーと笑いたくなります。

おわり



彼等の前に私が居る事だけで、彼等自身の自由な練習を束縛すると昨日頃、考える様になつて来た私なのであるが……。

口では随分大きな事を又ケ又ケとしやべりまくるが、いざやってみるとサツパリ何も出来やしないハツタリ屋の私。うわべだけスワールの大きい事を考えていた。云うなれば、夢を見て通した過去の日々だったと思う。こんな私もいざ馬術部を出てしまうと、もう一生、馬のウの字も語れない境遇になる様な気がして居らない。私の青春の想い出の一ページに私の今迄に経験したり、見たり、聞いた、読んだりしたものの中から、私の信念を書き止めておこう。この稿がどんな内容になつてしまふかは見当がつかない。真の、馬術から見るならば誤った考え方も中にはあるかもしれない。しかし今の私には正しいと思つてゐる事である。お読みになつてくれる皆様の馬術談義の話題にもなつてくれるなら望外の喜びです。私としては読ませる文ではなく、あくまで私の過去の記録を自分云い聞かせ、覆りでペンを執つてゐるのです。

(一) 調教者たらんとする者は

調教者はあくまで教える立場にあらずしてはならない。時には学校の教室でも、教師が生徒に教えられる事がある如く、馬についても同じ事は云い得る。がしかし、それがすべてではない。特に、教える」と云う立場を充ててはいけない。我々学生アマチュアに比べて最も困難な点でもあるが、その人の自覚さえあれば大して問題は無いと思ふ。その為には理論的にも自分なりの馬術論を少くとも持たねば嘘である。最近では私が入部した頃よりは、分り易い馬術教書が沢山出てゐる。北海道の冬、このシーズン中にスキー等に意を奪われぬ程、大いに読破せられてしかるべきである。そして調教者は騎手としての、

能力。忍耐。勤勉。に於て充分の自信がなくてはならない。そして更に精神的に見るならば愛馬に対する注意。心理の理解が調教結果を左右する最大の要因であること忘れたい。単に馬場に於ける練習が調教であるとは云えない。手は誰しも御存知の筈だ。毎日の健康状態を観察し、それに応じた練習内容、時間を検討の上、調教は行われなければならない。又、馬も人間同様、一日ひとりの知能指数も向上している筈である。或く云えば剛巧に、悪く云えばずるくなつて来るのである。それをうまくとらえる事が出来るか否かで、その調教者の能力を判定してもよいのではないか。

飛越馬の調教は、新馬に初めから飛越調教を施すことなく、充分なる基礎調教に於て、馬の体力、筋力を鍛えた後に施すべきである。いかに障礙飛越に適した馬といえども五才以下の若駒に計画的飛越調教を試みる事は、大

厨的にどの馬の一生を考へるならば、費策とは云えない。困難な障礙経路を自由にこなすには普通三年間の調教が必要とされる。従つてどの能力が九才十才位に最高に発揮される程に調教する事が最高の理想である。この理想に到達出来るよう計画性のある調教プランは絶対に必要である。

最も根本的必要不可欠なものは、調教者の身体の柔軟性である。我々学生は技術進歩を阻む最大のポイントではないか。馬術家たるもの身体の柔軟性をなくして、上達の道はないと想う。身体の特に堅い者は、練習時と云わず、毎日、朝夕、柔軟体操を心懸ける必要がある。我々社の命令では、まだある程度訓練によつて自分の身体を自由に割り上げることが出来ると思ふ。

(二) 障害馬たり得る馬は、

我々資本の欲しい学生にあつて、その理想

とする馬を自由に選択出来ない困難な点はあるが、どんな点に注目して馬を選択すべきか、最初から高度の飛越能力を有する若駒に出会す事は非常に少い。従つて馬格、血統、悍敏によつてその適否を判断すべきである。中でも重要な事は、悍敏のある事で、温順しい方が確かに扱い易いが、障礙場としては決して大成しない。これは単に馬房に居る馬や繫れてゐる馬をのみ見ては判断出来ない。人を乗せた時の馬の表情、動作を観察すべきではなからうか。

馬格としては

- (1) 肩が発達している事、競走馬の中では特にこの点見劣りするものがある。樹えレースで良く走つても障礙飛越には不向きである。
- (2) 頸の長いこと。将来調教が進んで障害飛越時の頸の動きが重要視される点に於て、長目の方が動きが柔らかく、その容姿も美しい。
- (3) 短背に過ぎないこと。競走馬に比べて良

馬は短背長駆と云われるが、障礙には不向きだと思ふ。障礙は駆だけで飛べるものではない。我々の種からすると、たゞ足が長ければ長い程、高い障礙を飛越出来る牝にも思ふが決してそうではない。障礙には全身の弾発力が必要なのだ。早い話が、北大の北嶽号、番大の碧垂号等を兜ると良い。又、日本のオリピンツク馬、エフオルジオ、富士、夏練等に於いても、極めて頤の発達している馬が多い。- (4) 前肢管骨、後肢跗前骨の短いこと。即ち飛蹄の地面に近いことである。障礙飛越の弾発力強弱の決定的要因である。先頃購入の話題に上つた競争馬キタニホン号が、この点優れてゐたと思ふ。

その他、注意深く管骨の鋭敏な馬が望ましく、去勢牡馬（駒馬）は牝馬に較べて調教は容易であり、多岐の弊がないとされてゐる。

(四) 裝備はいかに

(1) 勤・原則として水勒衝が理想的である。何となれば馬の推進氣勢をそこなわず、助長する最高のものが水勒衝であると思ふ。所謂大勒は過激な悍攻の高過ぎる馬にのみ有利である。大勒衝をもつてする飛越は特に乗取且慎重なる拳を必要とする。手綱は長さを正しくいつまでも調節可能に握られ又、*Martin-gal* 拳によつて馬の口向を邪魔せぬ杯配慮すべきである。上手に使用するならばこの *Martingal* 程重宝なものはないが、特に頭や頸を不安に動かす馬に対する補助用である。要にこれが重宝なのは、頸革である。鞍手の予期しない時、不意に馬が飛越を行った場合に身体が歪れて重心の平衡が破れそれを修正せんが爲にどうしても手綱に頼り、飛ろしく馬の口を痛める結果となる。どんなに技術的に優れている人でも、新馬調教に於てしばしば見かける状態である。こんな時、手綱を指から滑らし *Martingal* の頸革につかまる

争だ。そうすれば折角大番にして来た口向きを一時にして台無しにしてしまふ事もあるまい。しかしこの時と云えども決して手綱を放してはいけない。放すのではなく、あくまで弛めるのである。どんな事態が突発しても衝受けのあの觸り、融覚を忘れてはならないのである。かくして人馬一体の随伴運動が継続される。又この事は単に新馬調教ばかりでなく、老巧な馬に於ける初心者の障礙飛越練習に應用しても、好結果が得られると思ふ。調馬樂で馬を動かす、初心者には *Martingal* の頸革を握らせて、馬の動きを邪魔せぬ杯に随伴するにはどうしたら良いかを練習してもらえ。調教された馬をこわさずに初心者に練習させる方法としても良策と思ふ。

(2) 鞍

矢張り何と云つても障礙飛越調教にあっては、障礙鞍が欲しい。膝の固定と支持が得られない鞍は不向きである。少く共、膝止め

が高く作られたものを使用すべきである。我々の現在使っている鞍はかなり古いものもあり、中の蒲が飛び出してペシヤンコになっているものも少なくない。鞍のおり革はふくらはぎの上部、三分の一まで届いておらなければならぬ。鞍はスマートなものよりも、大きく重く、突発事故に際して即座に足先から抜ける杯なものを送ぶ必要がある。そして鞍革の止め金具が事故の際には直ぐ外れる杯点検し、整備しておくべきである。腹帯は糸のより合せたものではなく、ズツクかあるいは皮製のものを挟みたい。飛越中に拍車が糸の向にからみつく事もある。更に安全を期して腹帯の上には竟走馬の如く、うわはらゝをかけた

(3) 鞭

短鞭が良い。八十センチ以上のものは障礙飛越では出来るだけ避けた方がよい。理想からすれば六十センチ位が一番適当と思う。最

も騎手らしい鞭の採持法は鞭の一端を掌中に軽く握り、先端を下方に向けるべきで、所謂「逆鞭」は極力避けるべきだ。騎手の態度としても勇ましいかもしれぬが、礼儀正しいものではない。鞭の振り下す打垂で馬を調教するのではない。拳の位置を変えずに軽く肩に触れる程度のもので、合図に過ぎないのである。鞭をすっかり片手で握りしめて、方一杯振り下す敷しい鞭扶助は、馬を外方に迷走させる結果にしばしばなる。特にその片手で振り下す鞭の操作は特別に基礎練習を必要とするものであつて、誰にでも出来るものではない。充分に熟練した者にもみ許される鞭の操作である。又鞭の効果は二発位迄で、連続して三発以上たゝきつけるのは単に馬を感わすのみである。あるいは最初の二発、三発で効果のない鞭扶助は騎手の未熟とも云える。鞭は一発で決める自信がなければ使用しない方がよい。

④ 肢巻 蹄帽

障礙飛越馬には肢巻、ゴム蹄帽（、オワン）を常につけたい。肢巻は穂付け肢巻（バンデージ）よりも留め金付肢巻の方が安全である。肢巻をした場合、肢が水で濡れたり、汗をかいたりするとすれて揚めるから中に綿かスポンジを当てておいた方がよい。肢巻の効用は打撲傷を防ぎ、足の疲勞を回復させる事であり、又蹄帽は蹄冠接傷、蹄球接傷（這突交突等にもよる）を防止する爲である。

以上の裝備は単に乗馬する前にのみ点検するのでなく、騎乗中も時々折り返る必要があり、更に裝備を解く際にも損傷部分の有無を調べた上で格納するのも当然である。其の他長靴等も努めて手入れをし磨き上げたものをはくべきで、特に底に金具を打ったもの、羊張りのしたもののは用心すべきである。長靴を羊張りする時には必ず、土踏ますの両側に底に張った同じ厚さの革を二本打ちつけてもらう

べきであり、羊張りの釘が浮いて来ている様な長靴は避けるべきである。いざと云う時に籠が抜けないと、小さな事故も本当に命取りともなり得る。

(四) 妥当なる騎座姿勢

いかなる練習に於ても重要視される騎座姿勢でも多るが、一体いかなる姿勢が正しいのか、正しく鞍の三点に騎乗し、正しく拳を保持し、正しく上体を保つ……云々、と書いてしまえばいすれも、正しく……すれば良いのであって、言語では簡単に述べられる程でもあるが、姿勢なるものは決して表面的なものばかりとは云えない。私の持論からすれば、その人の内面的、精神的要素もかなり含まれると思ふ。即ちどの人の積極的自発的判斷力、勇氣は勿論、運動を正確に行わしめ、杯とする積極的意欲の中にも常に馬の心理状態を深く洞察する事の出来る精神約ゆくり、

寛容さもなくしてはならない。これらのものが
一体となり全体として調和のとれた状態を正
しい騎座姿勢と云うのだと思ふが、私はむし
ろ、妥当な騎座姿勢。と云いたい。何が正し
く、何が正しくないか。その判定は有能な一
人の人間に於ても非常に困難な場合が多いと
思ふ。、いづれがより正しいか。というのな
らまだしも、正しい……と規定する事は全
くの初心者を導く指標にはなつても、それ以
上の技能を磨く人にとっては混乱を捲き起す
結果になりはすまいか。従つてその何人々々
によつて精神的にも肉体的にも一致、調和し
た状態を云うべきであつて、この事を一つの
公式化、あるいは定理化する事自体、難しい
し、又これを単に模倣する事はナンセンスの
杯な氣もする。言葉はまずいが、健康なる
精神は健康なる身体に宿る」と云われるが如
く、我々の精神と肉体は分離され得べき性質
のものではないと思ふ。そこに於て初めて真

の、騎座姿勢、なるものが生れてくるのでは
なからうか、今迄の私達には余りにも外形上
の肉体的姿勢に氣を奪われ過ぎて来たのでは
ないかと思ふ。精神衛に、もっとゆとりのも
る所謂、無理のない、妥当な、姿勢が我
々の目標とすべきものではないだらうか。
しかし初心者のためにも徹切りの騎座姿勢
の弊に誤り易い点について附記しておこう。
私等しついでその悪い癖が出てくるのだが、
新馬調教に於いて、拳を高くして恰も馬を持
ち上げる杯になるのは決して良い事ではない、
障碍飛越調教中に取初一、二回馬に踏み切地
点を合図するのに私等は使うのだが、かえつ
て馬を迷わす場合が多い。又外形上も決して
美しくはない。拳は常に低く安靜に背骨の両
側に保たれるべきで、上体は背筋がむしる腹
の方に腕曲する位に伸び、馬の彈発に死じる
爲に、わずかに前傾すべきである。軽く前傾
すると座骨がすっかり鞍から浮き上つて力

カカしているのは腰のあるいは膝の柔軟性が乏しい証拠である。いつでも瞬間的に力を利かせ得る軽いあるいは強力な腰が理想的である。特に高い障礙を飛越させる時以外、尻を鞍から高すべきでない。障礙上で座骨は鞍から離れても縫裁部、騎座は密着させておくべきである。

さて、次の後に於て、實際の調教内容について一つのサンプルを提供しよう。と云つてもほんの参考位に。

(四) 目標到達迄に何をしたら

あくまで障礙飛越馬として目標に到達するにはどんなスケジュールが必要なのだろうか。障礙馬として自己の体躯四肢を自由に駆使し且、人馬が一体となって頭、脳をいっしょに走り、飛越する場には飛越調教と並行して実施される基礎馬術訓練が着々と計画性をもって行われなければならぬ。障礙飛越馬は要求度

の低い簡単な馬場馬術種目を用役姿勢を以て実施出来る位でなくてはならない。即ち高度の收縮姿勢は必要はないが、馬場程整備されてはいない野外で騎乗するに必要な收縮姿勢はとれる杯に調教しなくてはならないだろう。従つて、若駒の完全に発達してはいない体力、筋力を養う意味も勿論あるだろうが、飛越調教の度毎に常に先ず初めに平地の蹄跡運動を實施しなくてはいけない。

私は、今我々が行っている一時間三十分の練習を初駟の飛越調教には必要ない杯に思ふ。一時間位が適當と思ふ。(朝夕各一回づつ) もし一時間三十分もやるのなら一日一度で良いのではないかと思ふ。次に練習内容と時間の配分の一例を挙げて検討してみよう。

① (15分) 沉静運動

② (10分) 蹄跡運動を交えた80cm以下の

低障礙飛越運動。

③ (20分) 軽い收縮を求める運動

三種歩度の蹄跡運動

④ (ハ五分) 駢歩による飛越訓練

⑤ (十分) 終末運動

以上70分間となる。次に各節の要点はどこにあるのだろうか。

① 沈靜運動⇨主運動課目は、獨大自由なる常歩に重点を置き、馬を狭嶮にして伸々と運動出来る杯に行われる準備段階である。

② 返障礙飛越運動⇨飛越運動とは云え、この時向に種々の歩度で、ジャンジャン障礙を飛越させるのではなくて、必ず蹄跡運動を組み入れた中で実施すべきである。障礙も80cmを越す杯なものとは止めて馬場のあらゆる方向から障礙に向けさせ、その時々歩度(常歩、速歩)を以て蹄跡運動を交える。この際馬は常にその歩調及び落付きを保持しなくてはならない。特に騎手の留意すべき点は、手綱を調節したり、姿勢を変えたりして各飛越毎に馬に早まった注意を促し、これによって馬の

姿勢を乱さない杯心懸けなくてはいけない。

限初から障礙を越す馬には、特定の歩度を強制しない方が良い。馬の望む歩度をどのま、

どらせ乍ら、障礙の前を度々通過したり、どの直前で停止、後退次いで発進させたり、あ

るいは飛越後直ちに落ちかせて停止したりすると、馬は落ち着きを取り戻し慣れて来るも

のである。このようにして緊張を解かれた馬

は背筋、環が柔軟となり、頸の筋肉は長く伸びる。そして股の屈伸、前肢撤回、常歩及び

しはしは軽速歩を交えた速歩による正確なる蹄跡図形運動が課せられる。馬の服従はこの

際絶対条件であるが、同時に体躯四肢の弾発

促進及びあらゆる筋肉を伸長させる手が、前

提条件なのである。いかに促進する馬にあつても体躯四肢を凝固させての飛越調教は柯ら

得る所のない浪費以外の何物でもない。馬の早まる気持を充分静めてやり、完全に冷靜さを取り戻して初めて飛越調教に移れるのであ

って、もしこの坑着さが得られなければどの日はそれで止め、馬場外に出て馬の気分転換するのも良いだろう。兎に角、人も馬も早まった考えを拵つ事が一番いけない事である。

⑤ 軽い收縮と三種歩度の蹄跡運動。この時期になつて軽い收縮を求め運動へと移行する。何故障礙馬上新杯な收縮が必要なのかと云えば、その最大の意図するものは、後肢の動きにあるのである。軽い收縮をとらせる事により後肢の踏み込みを深くし、運動を潤滑ならしめると同時に、飛越を完全に支配する後肢の負担力を増進させる所にある。内方姿勢の要求は全くその時々々の調教程度、馬の体格に応じて然るべきであるが、究極的には肩を内への準備運動にまでどの要求の度を高めに行くべきである。ここで明確にしておきたい事は、障礙調教の收縮とは、馬場馬術的收縮の差異である。先日、このテーマでS君と要系店の片隅で大戸で互の論をたゞき合った

のも、今思えば寂しい想ひ出となるだろう。果外池の後輩諸君にも疑問に思っているかも知れない。私の論にしばし耳を傾けられたい。障礙飛越調教中の馬に馬場馬術的の收縮を求めることは左程意味のないことだ。即ち高度の收縮姿勢に於いては確かに後肢の踏込みも深く、飛越時の蹴力をつけるには良い事かもしれないが、項、頸の姿勢に難点がある。又、障礙飛越中の馬の動きは高度の障礙飛越を除いて、上下運動はその前後運動に較べて小さいものである。力の主方向（運動の主方向）を直線で表現するなら障礙に於ては水平線、馬場馬術に於ては鉛直線の運動方向と云えないだろうか。これが同じ、收縮姿勢に於ても、障礙とは、馬場との差異ではなからうか。障礙、馬場共に後肢を深く踏み込ませる收縮は必要である。がしかし、障礙のそれは上下の運動よりも前後の運動方向が大きく、馬場は前後運動よりも、上に高

くはね上り、下に深く沈み込む上下運動の方向がより強いと云えると思ふ。即ち障礙飛越馬に於ては用投姿勢程度以上の收縮を求めるとは、殆んど合目的でないと思へる。何と云へば、障礙飛越中の馬の理想的姿勢とは、体躯に凝固なく自然雄大な神々とした姿勢で、馬背は上方にぞる位にならねば嘘であるからである。この軽い收縮と正確なる三種の歩度の蹄跡運動がこの時期の主目的と心得べし。正確なる半域却及び全域却の完成、正しい後區、後肢旋回、半卷、内方姿勢騎乗は障礙飛越馬にとつて特に有益な訓練となり得るのである。

④ 駈歩の訓練に障礙馬は歩度をつめた作業駈歩（收縮は認められない）尋常駈歩及び自由駈歩との區別は厳密に教えられるべきである。帝歩、運歩と同じく駈歩に於ても前肢起揚と後肢の深い踏込は意識して断念しなから、あくまでも主眼点は依然として長い手綱

の下に頸を長く伸し、鼻尖を垂直線前に出して前進させる点にある。

⑤ 終末運動に練習の最後には必ずハ介位は終末運動にあてるべきである。手綱を長くして歩歩を行い、その間、一度ないし二度の運歩発進をさしはさむ。この様な終末運動はやもすると練習が終つたと云う安心感から堅辛になり勝ちであるが、新騎の若くてまだこのような過激な運動に慣れていないものには起りがちの筋肉痛苦を予防するものである。訓練後、馬は充分に汗を除かれ、安靜なる呼吸を回復した後に帰厩されるべきである。

初期に於ける障礙飛越の一般的注意事項を附記しておこう。

兎に角、馬を強いて連続障礙あるいは障礙経路を馬の常態、標準以下の歩度で飛越させる率は馬天然の前進意欲を制し、馬の正しい本能力を迷わすものであるから、特に留意したい。正当な踏切の手前直前で、騎手が整理

に準の操作で馬を制する事はやがて馬の不従順反抗を呼び起すことになる。自由にして馬の自然歩度に適合した冷僻なる前方推進扶助あるのみである。連続飛越あるは一障礙を路通過中に正しい扶助として許されるのは、ニヶの障礙物の中間に於て一度だけ半減却操作を施し、然る後、たゞ推進扶助を増加して行く事のみである。

悍威の非常に高い馬の場合は余りにも返屈であるが、忍耐が極めて必要である。歩度の速い馬に乗って、危走して正しく飛越する事は推進扶助を良く心得た騎手のみが、馬し得る仕事である。しばしば立髪を操で、声をかけてやり下ら、衝への支持を極めて軽くしてむしろし、しばしばこれをはずして、ひたすら軟和なる騎坐、環も軟和なる事を以て駈歩を統ける事は必要且つ、極めて有益なる補助運動である。

一般に一調教時間中に行う飛越の回数には

制限がある、たゞ騎手の好き勝手に、あるいは騎手の身体の遅れたのも忘れて飛越か下手であったからとして、目茶舌茶に飛越させる事は絶対に棄物である。普通は一調教時間中に5、20回の飛越が妥当とされている。飛越回数は最少限度であり、30は最大限度であるとも云われている。

⑤ 調教進度の目標として

一 飛越障礙馬として恥しくないものに仕上げられるには、三半の月日が必要と既述したが、以上述べて来た内容は、その初年度のものである。この時期に於ける一、二年前から基礎馬術訓練を受けたものに、この初な訓練を施すのである。それも障礙飛越調教を開始された一、二ヶ月の内に、以上の事が要求されるという事である。

障礙飛越調教を受け始めてから一ヶ月後には、四回ないし六回の障礙物を引続いて安全確

実に飛越し得る杯になる。

四ヶ月ないし、五ヶ月を経過した後には、障礙物の高さを漸次高めて一メートル位迄とし、初競に相当する障礙至路を飛越通過し得る杯になる。

以上の杯な調教を約半年間継続され、七ヶ月目位になつて充分競技に耐えるよう（あくまで自馬競技に）調教される事が理想とされている。がしかし、短期間に余りにも多くの争をする杯な早まった考えは止めるべきである。我々学生の若い血気にはやっとは、折角の努力も一瞬にして消え失せる結果ともなる。しかし大争に調教された馬は飛越調教開始後七ヶ月後から十二ヶ月以内に公認飛越競技に出場する事が理想とされてはいる。だが、だからと云つてこの期間に中級の障礙飛越調教に入る事は慎しみたい。

又、新馬調教中に常に心すべき事は集中的に調するのではなく、毎日の不断の調教が必

要であるという事である。調教者の気まぐれで乗られるのでは馬の方でもたまつたものではない。我々学生アマチニアとして、毎日何ヶ月も、否、何ヶ年にも及んで定められた時間調教する事は極めて困難でもある。がしかし、いかなる調教に於いても六ヶ月は最低限度継続しなくては意味がない。一ヶ月や二ヶ月ましてや、十日や半月位しか続けられない調教なら、むしろ止めた方が良し。我々学生馬乗りには特に心すべき事だと鬼う。決してあわてる必要はない。大会等を前にして、後幾日間で調教を完了させようなどと云うせっからな、無謀な新馬調教は厳につつしみたい。再び言うが、新馬調教は忍耐と勤勉以外にどの成功の道はない。のだから。

以 上



宮崎 健

◇帰省するたびに思ふことだが、大阪など自分がかつて暮らしていた土地でありながら、札幌とは生活のテンポがまるで違つてゐることを肌で感じては、奇異の想にとらわれる。考えれば当然のことなのだが、自分で味わねば分らない説明のつかない何かがあるように思ふ。三年を札幌で過ごしてみると、そこの生活が身についてしまつて、たまに帰省しては、もう溶けこぬぬ異邦人を身を感じるものだ。

◇通日友人と京都へ遊びに行つた。清水から吾平の方へ車を廻すと、京の味が分かるうといふつもりだった。でも、車は死んでゐるし、駐車場がないしで時の流れは如何ともし難い。

吾平の前の深い茶店の手几でじろろとばを食つてゐると、落着くことが出来た。街が伝統の中に思ひ込んでいる。北海道も京都も淡白なのだが、京のは何千年の伝統に培われてゐる生活からにじみ出てきたものだ。北海道のは伝統に背を向けた。価値判断が前にもある生活から出てきたものだ。

笹園の「角屋」の餅つきは有名だが、そんなお茶屋に学生の間で行ける音がない。八坂神社から下つてきたあたりが笹園だが、舞伎は近くで見るとアロチスクなもので、美人となると、いっこうにお目に懸らない。しかし少し離れたみると米塗りの家並や石だ、みつまつちして、あきれほども美しい。

お茶屋で庭をみながら茶の説明を聞いてゐると、練りに練つた文化の脈動が伝わってくるのだが、だからといって、北海道の前向きの変勢も魅力のあるものだ。二股かけてる今の自分には、どちらがよいなどとは云えない。

◇伝統の善さなどというものは京都の街並のようによつて、一つ一つのものではなく、旧々のまじりからくるものがある。馬術部三十年の伝統は、チームワークのとれたものを咲かせるのも不可能ではない。

◇市川氏の原稿が、ひやひやしてる。今日原稿を郵送するというのに、札幌で阿に合うことを祈る。

◇おわびニッ

★四軍目の方の原稿不揃いの為すでに出された小山、不塚両氏の原稿は次号に全頁架るまで預らせて置きました。

★三浦氏の「馬術部の文化活動について」は阿題提案の都合で切りました。大場さんの原稿とスペースをならみ合せたのと反響を持って、次号にでも討論の場を拝ちたいと願ったからです。